

今治市伊東豊雄建築ミュージアム年報 2011

発行：今治市伊東豊雄建築ミュージアム

発行日：2012年3月31日



T I M A  
IMABARI  
Toyo Ito Museum of Architecture, Imabari

今治市伊東豊雄  
建築ミュージアム

## 目次

1 コンセプト	4
1-1 今治市伊東豊雄建築ミュージアムのコンセプト	
1-2 今治市伊東豊雄建築ミュージアム オープニング展コンセプト…伊東豊雄	
1-3 アーカイブとしての建築空間《伊東豊雄建築ミュージアム》…植田実	
1-4 2011年にオープンしたミュージアム…東浩章	
2 沿革	12
2-1 今治市伊東豊雄建築ミュージアム沿革—計画から開館まで	
2-2 今治市伊東豊雄建築ミュージアムの開館に向けて…伊東豊雄	
2-3 開館のごあいさつ…菅良二	
2-4 大三島と伊東豊雄と私と…所敦夫	
3 施設概要	17
3-1 建築概要	
3-2 利用案内	
4 展示	21
4-1 展示活動について	
4-2 開館記念展「新たなる船出」	
4-3 みんなの家	
5 史料	26
5-1 伊東豊雄建築アーカイブ	
5-2 伊東豊雄建築大型模型	
5-3 大橋晃朗家具アーカイブ	
6 教育普及	31
6-1 建築教育と教育普及	
6-2 講演会	
6-3 子ども建築ワークショップ	
6-4 ギャラリートーク	
6-5 さまざまな活動	
7 広報	40
7-1 広報活動について	
7-2 ホームページ	
7-3 「TIMA通信」の発行	
7-4 「FMラヂオバリバリ」番組制作	
7-5 掲載された雑誌、ウェブ等	

8 調査・交流	45
8-1 建築ミュージアム、建築アーカイブの調査と交流	
8-2 世界の建築ミュージアム	
9 その他の活動	51
9-1 ミュージアムグッズの開発・販売	
9-2 VI（ビジュアル・アイデンティティ）の制作	
9-3 建築空間と活動	
10 運営・管理	54
10-1 来館者数と動向	
10-2 組織	

## 1 コンセプト

- 1-1 今治市伊東豊雄建築ミュージアムのコンセプト
- 1-2 今治市伊東豊雄建築ミュージアム オープニング展コンセプト…伊東豊雄
- 1-3 アーカイブとしての建築空間《伊東豊雄建築ミュージアム》…植田実
- 1-4 2011 年にオープンしたミュージアム…東浩章



ミュージアムから望む瀬戸内海の風景

今治市伊東豊雄建築ミュージアムは、2011年7月30日、わが国初の本格的な建築専門ミュージアムとして開館しました。建物が立つ敷地は、西に海と島々を望み、周囲をみかん畑に囲まれた斜面にあり、もっとも瀬戸内らしい環境にめぐまれているといえます。

#### ◎建築と展示空間・活動空間

ミュージアムは、伊東豊雄設計による独立した特徴的なふたつの建築、スティールハットとシルバーハットの2棟からなります。

スティールハットは、伊東豊雄の建築作品を中心としたさまざまな史料展示を行います。施設は、エントランスホール、それぞれ異なった形の空間が連なる3つの展示室、開放的なサロン、屋上テラスからなります。

建築の特徴は、4種の多面体（註1）が連結した結晶のような外観です。しかし、さらに驚かされるのは、正三角形と正方形面で構成された内部空間にあります。普段、私たちが生活している部屋では当然存在する四角い空間（壁・天井・床）や垂直に伸びる壁面が無い、一体的な空間となっています。部屋から部屋へ移動すると、まるでパノラマの連続的な空間を経験するかのようです。開館記念展では、瀬戸内海をイメージしてブルーに塗り込まれた空間のなかで浮き輪型のクッションにもたれ、まるで海の中を漂うようにゆったりと展示を鑑賞できる空間となっています。このように他のどこのミュージアムにもない特徴的な空間を最大限に活かした展示物、インスタレーションが採用されています。近年、ミュージアムの展示空間として議論されている「ホワイトキューブ」に代わるあたらしい展示空間のひとつといえます。

開館記念展のなかのひとつの企画である「みんなの家」は、世界中の建築家や学生、子どもたちから送られてきたドローイングを展示するものです。企画に賛同していただいた今治市内の小学生700人のドローイングも16回にわけて連続的に展示しました。会場のサロンには出品者である多くの小学生が、父兄や友人同伴で来場され、友人のドローイングを探したり、みんなの家を話題にしたり、長い時間を過ごしていたのは特筆すべきことかもしれません。

シルバーハットは、伊東豊雄旧邸を再生した建築です。7つの大きさが異なるヴォールト屋根が、3.6m間隔に立つコンクリート独立柱の梁に架かっています。一番大きなヴォールトの下の中庭は東西を貫通した一体的な大空間でワークショップスペースにあてられています。山側にアルミバンディングメタルの壁パネルが設けられていますが、視界も風も抜けて行きます。床はモルタル仕上げ。大勢の参加者が、モノを組み立てたり、木材を加工したりするようなワークショップに適した空間です。

また、この空間は島々の合間に沈み行く夕陽を望むスポットでもあり、夏の夕方から夜にかけて建築を題材にしたディスカッションの場としても利用され始めています。地元の子どもたちを対象にしたプログラム、また建築系大学のスタジオ（短期設計実習プログラム）の誘致も積極的に行っていくことが望されます。

北側の内部空間は、伊東豊雄アーカイブのある図書閲覧スペース。細長いヴォールト屋根の下に、長いテーブルと書棚が配されています。西側の階段を上がると伊東豊雄の建築に縁のある大橋晃朗の家具が展示されています。

#### ◎ランドスケープと屋外展示

伊東豊雄が設計した建築の大型スティール製模型（多摩美術大学図書館、MIKIMOTO Ginza2、サーベンタイン・ギャラリー・パヴィリオン）がスティールハット北側、シルバーハットの南側の縁地に展示され、斜面に沿った縁道を散策しながら見学できるようになっています。

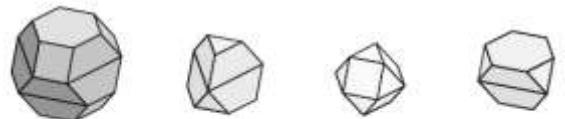
開館記念で行った子ども建築ワークショップでは、敷地内でピクニックの場所を探し、何人もの子どもたちがこの展示の回りで楽しげに昼食をとりました。

#### ◎ハンズオン型の建築ミュージアム活動について

今治市伊東豊雄建築ミュージアムは建築をテーマとしながらも、専門家だけではなく、今治市はもとよりミュージアムの立地する地域の人々や子どもたちが、身近な環境を問い直し、まちや地域コミュニティに働きかけていける学びを用意します。このような活動は、ミュージアムのスタッフのみで行うのではなく、地域内外のボランティアスタッフからの参加で行われます。2011年度開催のプログラムでは、すでに地元建築家、大学生等、多くの方の協力と創意によって魅力的なプログラムが実施されました。このような活動は、ワークショップに参加する子どもや参加者だけでなく、地域の文化的な活動の機会を創出し、新たなネットワークをつくり出すという効果を生み出します。建築専門のミュージアムとしてこのようなハンズオンを展開する例は、フランスやオランダ、アメリカなど海外にいくつかの事例がありますが、このような内外のミュージアムとの情報交換や連携も必要となってくると思われます。ワークショップやセミナーをはじめ、閉館後のプログラムや海外から来訪のゲストによるレクチャーなど、初年度におこなった数々の試行に基づいて、さらに教育普及のプログラムを充実させていきたいと考えます。

#### \*註1：4種の多面体

切頂8面体、切頂4面体、立方8面体、切頂4面体

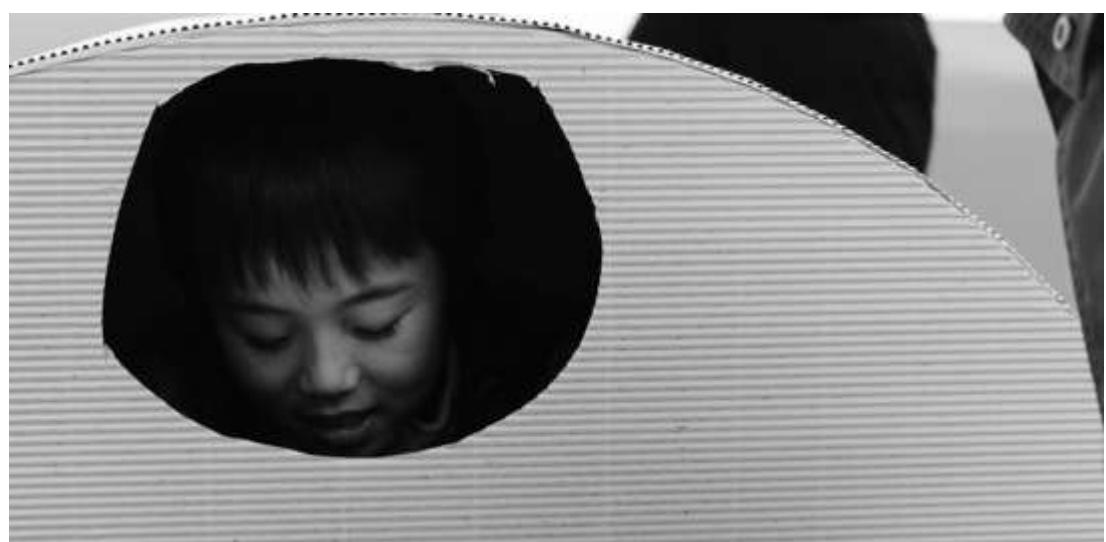


切頂8面体  
Octahedron

切頂4面体  
Tetrahedron

立方8面体  
Cuboctahedron

切頂4面体  
Tetrahedron



子ども建築ワークショップ「ハットにハットをつくろう」

## 1-2 今治市伊東豊雄建築ミュージアム オープニング展コンセプト

伊東豊雄（今治市伊東豊雄建築ミュージアム名誉館長）

「今治市伊東豊雄建築ミュージアム」は建築家個人の作品を展示するという国内では前例のないミュージアムです。このミュージアムは今治に所属する大三島の内海に面して建てられました。外部はすべて鉄板に覆われ、その姿も船のデッキのように見えます。

この建築がほとんど完成した2011年3月11日に東日本大震災が起り、東日本各地は大きな被害を受けました。津波によって跡形もなくなった被災地や原発事故を眼前にして、私たちは技術に全幅の信頼をおいて築き上げた経済万能の都市や社会のあり方を根底から見直さざるをえない状況に陥りました。それはまちづくりや建築の思想に関しても全く同じです。私達はこの震災を機に、まちや建築のあり方を原点に戻して、0（ゼロ）から考え直さなくてはならないと思います。

そのような時期にスタートする伊東ミュージアムのオープニング展のタイトルを、「新たなる船出」と題しました。伊東ミュージアムは海事都市今治からこれからの建築の夢を乗せて出航する船のように、新しい航海へと旅立つからです。

私たちはこれまで内外の公共的な建築を中心に、人々の集まる場所にさまざまな「かたち」を与えてきました。演劇を観たり、コンサートを聞く場、本を読む場、人を弔う場など行為はさまざまですが、つねに人々の「心が安らぐ場」をつくりたいと考えてきました。建築の中にいても、自然の中にいるように自由でリラックスでき、気持が和らぐような「かたち」を模索し続けてきました。

この展覧会ではこれまでつくってきた建築を巡りながら建築の原初的な意味、すなわち「人々の集まるかたち」を探る展示をしたいと考えます。小さな列島に浮かぶ建築の数々を巡って航海を続けるというストーリーです。

今回の被災地で目にするのは、避難所のなかでも、あるいは仮設住宅の外でも、人々が集まって笑顔で食事をしていたり、小さなコンサートを開いている風景です。こうした極限的な状況のもとでも人々が笑顔で集まる行動にこそ、私たちはコミュニティの最も純粋でプリミティブな姿を見る能够です。そしてこのような場にかたちを与える行為こそが建築の始まりと言えるのではないでしょうか。

私たちはこのような始まりの建築を「みんなの家」と呼び、被災各地に建てようという呼びかけを行っています。それは仮設住宅地の片隅に置かれる小さなりビングのような建築です。人々がそこに集まって飲んだり食べたりしながら語り合える場であり、あるいは子どもも高齢者も一緒に読書ができる場であり、メッセージを交換できる場であるような、小さいけれど心の安らぐ建築です。

伊東の代表作である「せんだいメディアテーク」も今回の震災で一部の天井が落下する等の被害を受けました。2001年のミレニアムオープン以来ちょうど10年を迎えた直後の出来事で、2ヶ月の休館を余儀なくされました。

「メディアテーク」は図書館、市民ギャラリー等が中心となった複合施設ですが、オープン後の10年間この施設もまた仙台市民にとっての「みんなの家」として愛されてきました。なぜならここには子どもから学生、主婦、高齢者にいたる多くの市民が、特定の目的がなくても集まって語り合う「心安らぐ憩いの場」となってきたからです。

「せんだいメディアテーク」の構造体にも多くの鉄板が使われています。しかもその鉄骨工事には被災地である気仙沼に工場を持つ造船の溶接工が力を結集してくれました。そうした意味ではこれもまた船のような建築なのです。その「メディアテーク」が10年の航海を経た後、被災してドックに入り、再びいま新しい「みんなの家」として航海に出ようとしているのです。

「新たなる船出」、「今治市伊東豊雄建築ミュージアム」はこれまでの、そしてこれからまちや建築へのさまざまな想いを乗せて、新しい冒險の途につこうとしているのです。

（今治市伊東豊雄建築ミュージアム オープニング展コンセプト…初出：開館記念展カタログ）

1-3 アーカイブとしての建築空間《伊東豊雄建築ミュージアム》  
植田実（住まいの図書館出版局編集長・東京芸術大学美術学部建築科講師）

◎ミュージアムという建築類型の直截な立ち上がり

今治市《伊東豊雄建築ミュージアム》が、2011年7月30日にオープンした。その前日の内覧会に行ってきました。瀬戸内海の大三島、その西端に位置する。東京からだと新幹線で福山まで行き、駅前で待っていてくれたバスに乗れば、尾道を経て向島、因島、生口島、そして大三島に至る1時間ほどの行程。しまなみ街道と呼ばれている。四国側から、つまり愛媛県今治市からは大島、伯方島を経て大三島に至る市圏である。

島々を結ぶ吊り橋の架構は高々と誇らしげで、次々にみえてくる港湾の産業施設にはくつきりとした風景の響きがあり、だがこうした人工物を平然と許容しながら、眼前からはるか遠くの水平線まで抜けてゆく、海と島の連なりの圧倒的な奥行きの深さを背景とした丘陵のみかん畑のなかに、ミュージアムの棟が待っていた。

東京の中野本町にあった伊東自邸を再現した「シルバーハット／アーカイブ・ワークショップ棟」と、新たに設計された「スティールハット／展示棟」である。この2棟が丘陵地の高みから同時に見下ろせる。事情を知らないと農業関係の施設かと見るかもしれない。ミュージアムとは思いもよらない併まいがじつにいい。不思議な姿である。

話は5年ほど前から始まつたらしい。元実業家の方がこの島に個人の美術館を7年前につくられた後、その隣にアネックス棟を加えたいということで伊東に設計依頼があったが、大三島町が今治市に吸収合併される動きのなかでプロジェクトが一時中断する合い間に、建て主と建築家とのあいだではミュージアムというものの理想を話し合う流れは続いていたのだろう。突然、建て主側からアネックス計画を転換して《伊東豊雄建築ミュージアム》とし、しかも今治市営とすることで地域の活動にも結びつける構想が提示された。そして実現に至った。

海と島とみかん畑のなかに建つ2棟の、ほかのどこにもないミュージアムは、もちろんこの恵まれた土地によるものもあるだろうが、それ以上に、東京などではまずありえない、人の力の働きに由来している。そこには中央と地方といった構図さえ消失して、ただ単純に、建築家の理想に耳を傾けることのできる人がいた。そしてミュージアムという、現在では形骸化しかねない建築類型の内実がもっとも直截に立ち上がった。

◎アーカイブとしての建築空間

このプロジェクトでさらに驚くべきは、すでに現代建築史に重要な位置を占めている《シルバーハット》(1984年)をここに持ってきてしまうという伊東の発想である。当の設計者・住まい手以外にはだれも思いつきようはないし、決断もできなかつただろう。またこれがなかつたら、ミュージアムがかくも強いインパクトを帯びることはなかつただろう。

そのいきさつを伊東はあっさりと説明している。近年亡くなられた夫人がその前から病いに伏されて以来、彼はマンション暮らしになっていたために《シルバーハット》は空き家のままだった。国内外の見学希望者に対応できる状態ではない。ならばいっそ「半公共的な空間として公開した方が良いかもしれないと思えてきた」と。

そのままに受けとめれば納得できる理由ともいえる。また「半公共的な空間」もこの住宅には初めから内包されていた。

たとえば早稲田大学の建築科で設計実習の授業を伊東と受け持っていたとき、ここを使わせてもらうことがあった。学生たちが、自分の設計した住宅の模型を持ち寄ってコートに展示し、講評を受けたのだが、コートだけで十分の広さ、しかも大学の教室よりずっと教室らしいスペースだったのである。だから伊東の言う「活動主体のミュージアム」のイメージにも合い、ワークショップ棟に転用されるのは必然とさえいえるのかもしれない。だが日本の戦後における住宅設計の、とりわけそれが建築家の自邸における意味を考えたとき、このような発想はほとんどなかつたことに気がつく。慣習的な住宅に逆らうかたちで未知の住宅をつくってきた建築家にとっても、そのリアリティの保証はそこに住むことの持続だったわけだから。

《シルバーハット》は、軽やかさや仮設性さえもこえて、建築らしさの縛めから可能な限り自由であることを計画したその頂点にある作品だが、それを移築してしまうまで伊東が自由であるとは考えもしなかった。今回私はまったく新らな建築家像を感じた。それが最大の出来事であった。

### ◎シルバーハット／アーカイブ・ワークショップ棟

移築された《シルバーハット》は「アーカイブ棟」ともなっている。アーカイブの収蔵棟とも建物自体がアーカイブとも受け取れるが、実際には中野本町にあったコンクリートの列柱はもとより、鉄骨の屋根もその部品も、そして建具も解体されて新らしい場所に移築再現されたのではない。元の建物は取り壊された。だから、モノそのもののアーカイブではない。生きて使われてきた建築と対比すればあきらかに下位の、物的記録としてのアーカイブは、伊東にはそもそも似つかわしくない。という建築家にたいする見方は、そのままこのミュージアムにたいする意識を構成する。

大三島の《シルバーハット》は、だから再現新築であるが、中野本町の《シルバーハット》の構成要素を何ひとつ欠くことなくそっくり復元したものでもない。大小七つのヴォールト架構や間取りは同じであるといつていいが、屋根仕上げやトップライト、また部屋の間仕切りやファサードのつくりに簡略化が見られる。ワークショップ活動に使いやすくアレンジしたといえるのだろうが、それ以上に、との住まいの記憶を、建築そのものをぎりぎりの線まで消すことで逆に浮上させ定着させようとしている。だから簡略化ではなく言語化とでもいえばよいのか。中野本町ではどの家とも同じように当然住まわれていることの現実が圧倒的だったから、どれほど革新的な建築であろうとそれへの私たちの理解は常套的だったのではないか。

いまそれはみかん畠の中腹にある。その向こうの海と島々の広がりは途方もない。上の道から海明かりの空の下で輝く七つのヴォールト屋根を見下ろしている。こういう視角は中野本町にはなかったからそのコンパクトなまとまりにあらためて驚かされる。しかしゆるやかにカーブする坂道を下って当の建物のなかに入ると、懐かしいおおらかなスケールが戻ってくる。コートの外を 180 度取り囲む海にも萎縮していない。むしろこれまで潜んでいた新しいスケールが発生している。見えなかった初めての「住まい」のかたちもある。ここにやってくる子どもたちは中野本町のそれと比べる必要もないだろう。彼等は建築の、住まいの基本を学ぶだろう。その意味でのアーカイブ棟だと思った。

開館した現時点では、かつてのリビング、ダイニング、和室、書斎がコートと一体化してワークショップスペースとされている。キッチンは図書閲覧スペースに、個室は家具展示室や収蔵庫に、一応はそれぞれ新しい用途が振り分けられているが、全体があまりにも開かれているために使われ方はまだ流動的であるようだ。このミュージアムは時とともに自然生成した形が見えてくるにちがいない。時間はたっぷりある。

### ◎刻々と動くアーカイブの様相

そのすぐ横に「スティールハット／展示棟」が、立地は前者より小高く突出したところで、建物自体も突出した形で海を見渡している。「4 種の多面体が、結晶のごとく連結した構成で、一辺 3m の正三角形と正方形面」からなり、「鉄骨フレームによるプレース構造で、外装仕上げを兼ねる 6 mm の鋼板とフレーム材が溶接で一体化」されている。あるいは「切頂多面体」とも説明されているが、ようするに、外観は黒々と閉じた複雑なマッスである。

だから思い切りオープンな《シルバーハット》との対比効果が考えられている、とも簡単には思えない（デビュー作の《アルミの家》をここに置いたら、より対比的に見えるかもしれない）。もっと異質な何か、という印象が強い。少なくともこれまでに実現された伊東の建築でこれに類するものを知らない。

### ◎スティールハット／展示棟 外観

思うのは、伊東邸とそこに隣接していた《中野本町の家 (white U)》(1976 年) が、2 棟で一体のように見せながら建築そのものを外している、つまり地下室とペントハウスだけがあつて本体であるべき部屋が見えないような構成になっていたわけだが、その外された部分、見えなかつた部分をあえて形にするしたら、「スティールハット」のいささか不可解な現われかたになるのではないか、だとしたらこのミュージアムはたんに一住宅の移築転用棟と新らな設計による棟とを足したものではなく、伊東の建築的ヴィジョンの大きな領域をくいとるかたちでできている。そういうアーカイブなのかもしれない。

興味深いのは「シルバー」と「スティール」の建築面積がほぼ同じであることだ。このワークショップに参加する子どもたちは、同じ建築面積でこれほどに違う形態・空間になることを知つて驚くにちがいない。それこそが建築の基

本、すなわちシステムであることを学ぶ手がかりにもなるだろう。

「スティールハット」はエントランスホール、3展示室、休憩のためのサロン、屋上テラスからなる。不整形であるためにか、個々の部屋がはっきり区切られているという感じがしない。閉じているが連続している。そんな三つの展示室の壁・天井にはパノラマのように多島海がつくられ、それぞれの島には伊東の手がけてきた建築が載せられている。その模型の縮尺率がそれぞれ違っているのでまた思いがけない興味がわいてくる。最後の展示室から階段を伝つて降りる高い天井のサロンは半ば屋外の気分だ。けっして閉じた建物ではないのだ。こうして建築の、建築のシステムの驚異に触れた子どもたちが図書閲覧スペース（伊東の約90件のプロジェクト図面のアーカイブがある）にこもって実施図面集などを読みふけるようになったら凄い。その日は確実にくるだろう。

#### ◎スティールハット／展示棟 内観

ほかに例のないこのミュージアム計画に連鎖反応をおこしたかのように、やはり伊東の手がけた今治市《岩田健母と子のミュージアム》がすぐ近くに8月20日オープンした。埼玉県川口市の彫刻家岩田のじつに愛らしく毅然とした作品群が見られる屋外展示室だが、それは《中野本町の家（white U）》の虚としての中庭を思い出さずにはおれない。しかし一変して親しみやすいポジ空間になっている。ひとつの空間が多様な表れを秘めている建築の力をそこでも知ることになるだろう。今治市《伊東豊雄建築ミュージアム》のアーカイブとしての様相は、まだ刻々と動きつつある。

#### 参考と引用

『新たなる船出』（今治市伊東豊雄建築ミュージアム、2011年）

『伊東豊雄—2010』（エーディーエー・エディタ・トーキョー、2010年）

（アーカイブとしての建築空間《伊東豊雄建築ミュージアム》 初出：10+1 掲載記事…特集：建築アーカイブ／建築ミュージアム <http://10plus1.jp/monthly/2011/09/post-28.php>）



シルバーハット 伊東豊雄建築アーカイブ

「今治市伊東豊雄建築ミュージアムがオープンしたのは、東日本大震災が起きた年と同じ 2011 年です。」この言葉は、今後ミュージアムが運営されていく中で繰り返し、語られていくことになるはずである。その意味は何なのか。私は以下のように思う。

#### ◎若い世代の初めての共通体験

若い世代、とりわけ私も含めた現在の 20 歳代は、阪神淡路大震災やオウム関連の事件が起きた 90 年代には主に小学生だった層であり、自分達が何かしなければならないと感じることはできなかつた。そんな世代にとって、今回の東日本大震災とそれに伴う原発事故は、実質的には首都圏を巻き込んだ初めての負の共通体験であったと言って良い。もちろん、阪神淡路で被災された方は小学生であろうと強く記憶に残っているはずだし、現に関西圏の NPO やボランティア団体においては、今まで引っ張ってきた団塊の世代の後に、1995 年当時学生だった人たちが次代の担い手として活躍していると聞く。

所氏や大三島町・今治市がつくりあげてきたものに、伊東の「若い建築家の育成をしたい」という思いが加わって完成したミュージアムにあっても、この若い世代の初めての共通体験は重要な意味を持っている。この体験は私達に「これから建築やまちについて再考する必要がある」ということに対して、リアリティを持って向きあうきっかけを与えた。今後のミュージアムの運営においては、多くの人が集い、「これからの建築」を考え、つくる場所とするために、建築家や大学研究室などが自由に往来できるような環境を整備していくことが重要な課題であるように思う。

また、開館記念展「新たなる船出」の重要な展示である「みんなの家」では、今治市内の小学生にスケッチを募集したところ、700 枚の絵が集まった。700 人の小学生に「人の集まるかたち」のイメージを描いてもらえたことはミュージアムの一つの実績となった。夏と冬を行った子どもワークショップでも建築家になりたいと言ってくれた小学生が数名いた。幼少期にミュージアムを通して建築に触れ、将来建築家になったという人が多く輩出されるような場所になればよいと考えている。

#### ◎地域の中のミュージアム

いつだって地域やコミュニティは重要である。特に社会に不安感が蔓延しているときは尚更だ。この度の震災でも「キズナ」といった言葉で繰り返されているその目に見えにくいものに対して、建築というカテゴリーでどこまで迫つていけるかがミュージアムにも問われているのだと思う。この問いを語る上で、2011 年 10 月に仙台市宮城野区に完成した「みんなの家」は、題材として相応しい。私が思うに、「みんなの家」とは、つくる人・つかう人の垣根を越え、さまざまな人々を巻き込みながら建築をつくり、そしてそこに人々が集い、語り合い、心を通い合わせるプロセスのことである。2012 年度も引き続き、現在のものを発展させるかたちで展示をしていく予定である。

また、地域の方向けに開催した「サタデーナイトミュージアム」では、今治の建築家、エターン者、主婦、高齢者、子どもなど、様々な立場の人と一緒にミュージアムの運営について語り合える場をつくることができたこともよかつた。今後はミュージアムの運営だけでなく、私達の地域をつぶさに観察し、よりよいまちへとつなげていくことができる場所にしていきたい。その際には、外部の学生等と一緒に作業していくことができたら、もっとミュージアムが面白い場所になっていくはずである。人が集まり、将来のまちや建築について語り合える「みんなの家」として、ミュージアムが振る舞えるかどうかが重要である。

最後に。子どもに建築を語るときに、何を語ることができるのかと考えると、建築を考える上で核となる部分をいかに取り出して、伝えることができるかということにかかっている。それは建築関係者以外に語るときもそうである。また、ミュージアムがこれから活動をする上で地域に足をつけ、深く関わっていくような姿勢も必要とされるだろう。そんな最先端というよりも最深部にあるミュージアムになることができたらよい。

- 2-1 今治市伊東豊雄建築ミュージアム沿革—計画から開館まで
- 2-2 今治市伊東豊雄建築ミュージアム開館に向けて…伊東豊雄
- 2-3 開館のごあいさつ…菅良二
- 2-4 大三島と伊東豊雄と私と…所敦夫



ところミュージアム大三島

## 2-1 今治市伊東豊雄建築ミュージアム沿革－計画から開館まで

2004 年

6月 横浜市在住の所敦夫氏（ところミュージアム大三島名誉館長）からの寄付金（対旧大三島町）により「ところミュージアム大三島分館建設基金」設立。

10月 （株）伊東豊雄建築設計事務所へ「ところミュージアム大三島分館建設にかかる基本設計業務」を委託。

2005 年

1月 大三島町ほか 10 町村と今治市が合併し、新今治市発足。「ところミュージアム大三島分館建設基金」を新今治市で引き継ぐ。

2008 年

3月 ところミュージアム大三島分館を「伊東豊雄建築ミュージアム」として整備することが決定。

8月 スティールハット設計業務開始。

2009 年

伊東氏の寄附で旧自邸のシルバーハットを再生して整備することが決定。

4月 シルバーハット設計業務開始。

2010 年

8月 スティールハット建設工事着工。

9月 シルバーハット建設工事着工。

2011 年

3月 スティールハット竣工。

5月 シルバーハット竣工。

7月 今治市伊東豊雄建築ミュージアムオープン。伊東氏が名誉館長に就任。

子ども建築ワークショップ「建築探検隊」開催。

8月 トークセッション「アートにできること、建築にできること」開催。

2012 年

3月 建築セミナー「これから建築、これからのまち」開催

子ども建築ワークショップ「ハットにハットをつくろう」開催。

2-2 今治市伊東豊雄建築ミュージアムの開館に向けて  
伊東豊雄（今治市伊東豊雄建築ミュージアム名誉館長）

所敦夫氏がギャラリー長谷川の長谷川浩司氏と私のオフィスに初めて来られたのは2004年です。大三島に御自身の「ところミュージアム大三島」を寄贈された所氏がその隣にアネックスをつくられるということでその設計依頼のためでした。まだ大三島が今治市と合併する前のことです。

かつて訪れたことないこの島に所氏等と共に足を踏み入れた途端、島の美しさと島の持つ不思議な力に圧倒されました。地靈の存在が伝わってくるような土地の潜在を感じたのです。

設計は敷地を選ぶことから始まりました。瀬戸内の島々を見下ろすみかん畑の傾斜地からの眺望は絶景でしたが、いざ建物を配置しようとすると平地がほとんどなく、決して容易ではありませんでした。

設計は二転三転し、やがて大三島町は今治市と合併しましたが、その間私は所氏や長谷川氏に将来の建築にかける夢を語りました。私が若い建築家を育てるための塾をつくりたいことを話すと、突然お二人が「それならばここでやればいいじゃないか」と言って下さったのです。

今治は巨匠丹下健三氏の出身地です。そのような土地に私の建築ミュージアムがつくられることには大きな躊躇がありました。しかし菅市長以下市の皆様方の温かいお勧めに甘え、お受けすることにしました。

さらに私の自邸として1984年に東京中野に実現、建築学会賞をいただいた「シルバーハット」もこの地で再生させていただくことになりました。

かくして所氏から市に寄附された「スティールハット」は展示を中心としたパビリオンとして、「シルバーハット」はワークショップ及びリサーチのスペースとして、瀬戸内の美しい海を背景に並び立つこととなったのです。

所氏や長谷川氏、菅市長や市議会の皆様、多くの市民の皆様方に心から御礼を申し上げる次第です。この建築ミュージアムが今治市の将来の発展のために貢献するよう微力を尽くす覚悟です。

（今治市伊東豊雄建築ミュージアムの開館に向けて…初出：開館記念展カタログ）

## 2-3 開館のごあいさつ

菅良二（今治市長）

瀬戸内の風光明媚な多島海のほぼ中央部、日本総鎮守「大山祇神社」に代表される歴史に彩られた大三島の地に、日本で初めての建築ミュージアムが開館する運びになりました。

この度、世界で最も注目を浴びている建築家の伊東豊雄さんをテーマとするミュージアムを開設できることは光榮で意義深いことであると感謝しております。

本ミュージアム誕生のきっかけは、横浜市在住の所敦夫様より平成16年に開設した現代彫刻美術館「ところミュージアム大三島」の分館建設資金をご寄附いただいたことに始まります。その後、伊東さんの建築家育成の思いに賛同され、新しい施設で実現させることになりました。あわせて伊東さんからも旧自邸「シルバーハット」の再生・ご寄附の申し出をいただき、次々に構想が発展して今回のミュージアムへと成長しました。

さながら、大山祇神社で古より催された「法楽連歌」に相通する流れであると感じます。

難解に思われるがちな現代建築ですが、伊東さんの近年のお仕事は、その柔らかな人柄のように、建築の心地よさや楽しさ、美しさを自然と感じじうことができるものになっており、そのことが国内外での高い評価と活躍に繋がってきているものと思われます。

開館に先立って実施いたしましたワークショップでの子どもたちの笑顔が、このミュージアムの「新しい船出」の成功を約束しているように感じています。

今後、このミュージアムをいかに充実させ、世界に情報発信し、地域の活性化につなげていくかが、私たちの使命であると思います。

最後になりましたが、伊東豊雄様、所敦夫様をはじめ、ご尽力・ご協力を頂きました皆様方に対しまして心からの謝意を表します。

（開館のごあいさつ…初出：開館記念展カタログ）

2-4 大三島と伊東豊雄と私と  
所敦夫（ところミュージアム大三島 名誉館長）

しまなみ海道で本州、四国とつながった今も、大三島には離島独特の空気が漂い、行きかう子どもたちが見知らぬ人とも笑顔でいさつを交わすといった風洞、人情があふれている。

始まりは心に残る小さな武術館をつくりたいものと候補地を探していた私が、ギャラリー長谷川の長谷川浩司さんの案内でこの未知の島を訪れたことによる。長谷川さんはすでに大三島町立大三島美術館の形成に関わっており、これが私の大三島訪問につながった。

瀬戸で海を見下ろすみかん畑の斜面に立った瞬間、これこそ求めていた場所だというインスピレーションに打たれた。小さな美術館は「ところミュージアム大三島」と名付けられ、設計に山本英明さん、作品コレクション形成に長谷川浩司さんを任じて2004年に開館した。その直後、思うところあって、大三島町に寄贈させて戴いた。完成を待たずして亡くなったり、妻千鶴子への思いもこめて。

手許に何枚かの図面がある。題して「仮称ところミュージアム大三島 第2期新築工事 基本計画案 伊東豊雄建築設計事務所」。日付は2004年12月。これは、ところミュージアム大三島のアネックスとして計画された展示スペースを意味した。当時の私はこの高名な建築家について知るところは殆どなく、紹介者である建築評論家、馬場璋造さんの「いつも新しいことにチャレンジし続けている建築家ですよ」という言葉をよりどころとして伊東さんに設計を依頼した。

私は、図面を見た時のことを鮮明に思い出す。そこに描かれているのは透明クラゲ、あるいはナマコとでも呼びたいような軟体動物的なモノだった。顔を上げて伊東豊雄さんはニコニコしていた。そして、私は、その目のトリコとなつたのだった。

結果を言えば、この魅惑的な“軟体動物”は残念なことに日の目を見なかつた。この翌年実施された市町村の大合併によって、大三島町が今治市大三島町となつたこともあり、「ところミュージアム大三島II」計画も再考されることになった。時間の流れとともに情勢も変化していくのである。

しかし、“再検討”に決して無駄に過ごされたわけではなかつた。特筆すべきは、伊東さんが建築の分野で、私塾の様な活動をやりたい、子どもや若い世代に自分の考えを伝えたい、という強い願望を持ち続けていたことであろう。多分これがオクラを開く“魔法の言葉”になつたのではなかろうか。ところミュージアム大三島IIはヘンシンして、今治市伊東豊雄建築ミュージアムとなり、日の目を見たのである。その間の関係各位のご尽力、また伊東さんや事務所のスタッフのご努力には感謝の他はない。島の漁業組合のガレージで、名物牡蠣の浜焼を堀田組合長の手料理でごちそうになつたのも懐かしく思い出される。

元大三島町長、故・菅省三さんが大三島美術館として蒔いた一粒の麦は世紀をまたいだ今、それぞれ特徴のある3つの美術館、「ところミュージアム大三島」「伊東豊雄建築ミュージアム」、この後開館の「今治市岩田健母と子のミュージアム」として芽を吹くにいたつた。以て瞑されんことを。ひとつの島に誕生した3つの美術館は浅からぬ縁によるものであろう。

その初めの芽となつた、「ところミュージアム大三島」も、私が長谷川さんと知り合つた事に端を発しているといつても良い。

（大三島と伊東豊雄と私と…初出：開館記念展カタログ）

### 3 施設概要

3-1 建築概要

3-2 利用案内



### 3-1 建築概要

今治市伊東豊雄建築ミュージアムは、伊東の作品を展示するスティールハットと旧自邸を再生したシルバーハットの2棟からなります。

スティールハットは、エントランスホール・3つの展示室・休憩をするサロン・テラスからなります。4種の多面体が、結晶のごとく連結した構成で、一辺3mの正三角形と正方形面でできています。構造は、鉄骨フレームによるブリース構造で、外装仕上げを兼ねる6mmの鋼板とフレーム材が、溶接で一体化されています。内部空間は、屋根・壁・床の区別が消え、求心性をもつと同時に、壁がパノラマ的に展開していきます。

シルバーハットは、3.6m間隔のコンクリート柱に架け渡された梁に、ひし形フレームからなるアーチ状の屋根が載っています。図面の閲覧ができるスペースや、屋外ワークショップスペースからなります。

敷地内には、瀬戸内海と島々を背景にして屋外展示物が点在し、散策することができます。

#### ◎スティールハット建築概要

設計：建築 伊東豊雄建築設計事務所（担当／伊東豊雄、東建男、岡野道子、矢吹光代）

構造 佐々木睦郎構造計画研究所（担当／佐々木睦郎、平岩良之）

設備 イーエスアソシエイツ（担当／佐藤英治、入口新吾）、大瀧設備事務所（担当／大瀧牧世）

施工：大成建設

面積規模：敷地面積 6295.36 m<sup>2</sup>

建築面積 194.92 m<sup>2</sup>

延床面積 168.99 m<sup>2</sup>

階数 地上2階

構造：鉄骨造、一部鉄筋コンクリート造

寸法：最高高 8944.9mm

天井高 居室 2264.6mm

敷地条件：都市計画区域外

設備：空調設備 空調方式…電気熱源電気式ヒートポンプ、換気設備

衛生設備 給水…水道直結方式、排水…合併処理浄化槽

電気設備 受電方式…低圧受電

工程：設計期間 2008年7月～2009年8月

施工期間 2010年8月～2011年3月

外部仕上：屋根 鋼板6t+遮熱性フッ素樹脂塗装

外壁 鋼板6t+遮熱性フッ素樹脂塗装

開口部 ガラス、外構 貼芝

内部仕上：エントランスホール、ROOM1・2・3

床 モルタル金ゴテ押さえ+浸透性コンクリート表面強化仕上げ剤（ATOMIX）

壁 プラスターボード+EP

天井 プラスターボード+EP

サロン

床…モルタル金ゴテ押さえ+浸透性コンクリート表面強化仕上げ剤（ATOMIX）

壁…コンクリート打ち放し+水性フッ素樹脂カラークリヤー塗装、シナ合板+オスモカラー

天井…プラスターボード+EP

主な施設：エントランスホール（企画展示、受付、ミュージアムショップ）

ROOM1～3（常設展示）

サロン（常設展示、木製大型模型）

屋外（常設展示、大型模型）

◎シルバーハット建築概要

設計：建築 伊東豊雄建築設計事務所（担当／伊東豊雄、東建男、岡野道子、矢吹光代）

構造 O.R.S.事務所（担当／依田定和、平野慶一）

設備 イーエスアソシエイツ（担当／佐藤英治、入口新吾）、大瀧設備事務所（担当／大瀧牧世）

施工：大成建設

面積規模：敷地面積 6295.36 m<sup>2</sup>

建築面積 168.32 m<sup>2</sup>

延床面積 188.32 m<sup>2</sup>

階数 地上 2 階

構造：鉄筋コンクリート造 一部鉄骨造（屋根）

寸法：最高高 4804mm

天井高 居室 2829mm

敷地条件：都市計画区域外

設備：空調設備 空調方式…空気熱源電気式ヒートポンプ

衛生設備 給水…水道直結方式、排水…合併処理浄化槽

電気設備 受電方式…低圧受電

工程：設計期間 2009年4月～2010年8月

施工期間 2010年9月～2011年5月

外部仕上：床 モルタル金ゴテ押さえ+浸透性コンクリート表面強化仕上げ剤（ATOMIX）

外壁 コンクリート打ち放し+水性エポキシ樹脂塗装・アモペネル 33t・アスロック 60t・鉄板 3.2t+

フッ素樹脂塗装・アルミパンチングメタル 2t

天井 ケイ酸カルシウム板+EP、鉄骨部フッ素樹脂塗装

開口部 ガラス、外構 貼芝

内部仕上：図書閲覧スペース

床 モルタル金ゴテ押さえ+浸透性コンクリート表面強化仕上げ剤（ATOMIX）

壁 ブラスターボード+EP

天井 ケイ酸カルシウム板+EP、鉄骨部OP塗装

主な施設：屋外ワークショップスペース…ワークショップ（親子ワークショップなどを開催）

図書閲覧スペース…アーカイブ（伊東豊雄の建築図面等を収蔵）

家具スペース…大橋晃朗の家具を展示



左：スティールハット、右：シルバーハット

館 名：今治市伊東豊雄建築ミュージアム  
(英名：Toyo Ito Museum of Architecture, Imabari)

観覧料：一般 800円、学生 400円

\*団体（20名以上）、65歳以上は2割引は20%引き（カッコ内料金）

\*高校生以下又は18歳未満無料

\*障害者とその介助者1名無料

開館時間：9:00~17:00

休館日：毎週月曜日（祝日の場合は原則翌日振替）

年末（12月27日～12月31日）

所在地：794-1308 愛媛県今治市大三島町浦戸 2418

ウェブ：<http://www.tima-imabari.jp>

電話：0897-74-7220

ファクス：0897-74-7225

Eメール：[info@tima-imabari.jp](mailto:info@tima-imabari.jp)

◎図書閲覧スペース

伊東豊雄建築アーカイブ、伊東豊雄関連書籍及び映像を閲覧することができます。コピー等のサービスは行なっておりませんので、予めご了承ください。

◎ワークショップスペース

建築関連イベントのために貸出を行なっています。使用料は無料です。指定の書類を提出していただき、審査の後利用することができます。詳しくは、上記連絡先までお問い合わせください。



シルバーハット ワークショップスペース

## 4 展示

- 4-1 展示活動について
- 4-2 開館記念展「新たなる船出」
- 4-3 みんなの家



現在のミュージアムの展示物は主に以下の4種類です。

- 1.伊東がデザインした建築そのもの（スティールハット、シルバーハット）
- 2.伊東がデザインした建築・家具の図面・模型・写真・映像
- 3.大橋晃朗がデザインした家具
- 4.世界中の建築家・学生・今治市内の小学生等による「みんなの家」のスケッチ

#### ◎身体で感じる展示

ミュージアムには、建築の専門家だけでなく、様々な人が訪れます。その時に身体で感じることのできる展示は非常に有効です。4種類の展示物の中では、1と3がそれに該当します。ミュージアムを構成する建築であるスティールハットとシルバーハット、大橋による家具は、老若男女問わず、触ったり、寝転がったり、座ったり、見上げたりと身体でその対象に迫り、感じることができます。一方で、模型や図面などの二次的資料については、コンセプトや機能、建設場所等の情報とともに、その内部感覚を伝えるために写真等を用いて解説しています。

#### ◎みんなの家

帰心の会（註1）から世界中に呼びかけが行われた「みんなの家」は、今治市内の小学生にも開館前に呼びかけを行い、700枚の応募がありました。小学生の描いたスケッチは16回に分けて全てスティールハットに展示しました。世界の名だたる建築家と小学生の絵を同列に点在させた展示は「みんなの家」のコンセプトそのものを体現していたように思います。応募していただいた小学生には2枚の招待券をお返しし、保護者の方にも来ていただけるようにしました（高校生又は18歳未満は観覧無料）。このように、「みんなの家」は専門家からそうでない人まで多くの方にご協力いただき実施された参加型の展示となりました。さらに、この「みんなの家」という概念は、子どもにも分かるオープンなものであると同時に、今日本に必要とされている重要な課題の一つでもあります。

#### ◎東日本大震災

開館記念展「新たなる船出」は、東日本大震災を経て、今まで計画していた展示計画を白紙に戻して、新たに作成したものでした。瀬戸内海の大三島という今回の震災・津波とは縁遠い場所ですが、震災をベースにした展示を行うことで、報道で伝えられる震災を「建築」というフィルターを通して再考していただける機会になったのではないかと思います。

#### ◎これから

2012年度は夏休みになる前に展示替えを計画しています。エントランスホール及びサロンを企画展、ROOM1～3を常設展という位置づけでリニューアルする予定です。展示は、小さな模型だけではなく、最新プロジェクトのモックアップや映像等を用いて、身体的に理解できるようなものになります。また、2012年度に計画されている大学との共同プロジェクト等のせいかも公開し、展示と活動を一体的に推進していきます。

#### \*註1：帰心の会

帰心の会は、建築家の伊東豊雄、山本理顕、内藤廣、隈研吾、妹島和世の5人が東日本大震災の被災地復興に向けた活動を行う会である。

#### 4-2 開館記念展「新たなる船出」

会期：2011年7月30日～2012年6月24日（予定）

趣旨：船のデッキを思わせるこのミュージアムは海事都市今治から未来に向かう建築の夢を乗せて、新しい航海へと旅立ちます。私たちは何を求めて航海へと出るのでしょうか。私たちは自然から切り離されて人工的な環境で埋められた近代主義的都市空間から人々を解放し、自然に親しむ、より人間的な生活を取り戻せる環境をつくるねばならないと思います。

そして住むことの意味、コミュニティの意味、そして建てることの意味を0（ゼロ）から考え直すこと、震災を機に、こうした問題こそがいま建築家としての私たちに問われているのだと思います。

（開館記念展「新たなる船出」より）

##### ◎展示1…せんだいメディアテーク 1995-2011 | エントランスホール

伊東豊雄の代表作「せんだいメディアテーク」がコンペティションで選ばれ、2001年にオープン、その後10年間仙台市民を中心とした利用されてきましたが、2012.3.11の東日本大地震で被災、修復工事のため2ヶ月休館、2012年5月にふたたびオープンしました。

船の溶接工によってつくられた建設工程になぞらえ、ドックから出てきた船がふたたび航海に繰り出すようなプロローグ展示では、せんだいメディアテークの16年を振り返ります。

・主な展示物：

せんだいメディアテーク模型

せんだいメディアテーク写真（畠山直哉）

せんだいメディアテーク開館～現在（東日本大震災時含む）の映像上映

##### ◎展示2…人の集まるかたち | ROOM1, 2, 3

伊東豊雄がこれまでつくってきた建築を巡る旅。小さな建築模型は、青く塗られた壁面に浮かぶ（瀬戸内海に）小島を敷地として建っています。ひとつひとつ異なった構造システム、幾何学による新しい建築の在り方を示しています。ROOM3。宙に浮かぶ多面体「マイコスモス」の内部には、これから建築と自然環境のさまざまな関係を示す模型がつくられています。天井や壁には「建築とは何か」を問う様々な人々のメッセージが書かれています。

##### ◎展示3…「みんなの家」を描こう

震災後、避難所や仮設住宅で被災した人々の極限的な環境での暮らしが続けられています。そこで私たちは被災地での生活をもう少し人間的に、もう少し居心地よくすることができないか、という思いから「みんなの家」のプロジェクトを提案しています。家を失った人々が心の安らぎを得られる場所、それが「みんなの家」なのです。「みんなの家」はこのような暮らしを強いられている人々が集まって、憩い、話し合える心の安らぎの場、最も原初的なコミュニケーションの場なのです。ここでは世界の建築家や建築を志す学生、子どもたちに「みんなの家」のイメージを描いてもらいました。

展示計画：伊東豊雄建築設計事務所（伊東豊雄、泉洋子、古林豊彦、岡野道子、近藤奈々子、高池葉子、山田明子）

展示制作・設営：

模型…伊東豊雄建築設計事務所、塗装・カーペット…大成建設、布カバー…安藤陽子

文字レイアウト・製作…廣村デザイン事務所（廣村正彰、丸山智也）、株式会社デンショク

設営協力…青陽孝昭建築設計工房（青陽孝昭）、宮本哲、青柳有依、広島大学千代章一郎ゼミナール、東京大学太田浩史研究室、神戸芸術工科大学鈴木明ゼミナール

特別協力： せんだいメディアテーク、畠山直哉、帰心の会（伊東豊雄、山本理顕、内藤廣、隈研吾、妹島和世）



左：展示1「せんだいメディアテーク」、右：展示3「みんなの家」



左：展示2「人の集まるかたち」、右：多摩美術大学図書館模型（「人の集まるかたち」より）

「みんなの家」は、3.11 の被災地のひとびとへの支援のために結成されたボランタリーな建築家の集まり、帰心の会（伊東豊雄、山本理顕、内藤廣、隈研吾、妹島和世）の発案によるプロジェクトです。全世界の建築家に向けて、建築家が被災地のためにアイデアと希望をドローイングにまとめて送ってもらうことを呼びかけました。

その結果、世界 22か国、171名（個人およびグループ）の建築家を初め、デザイナー、フォトグラファー、画家、学生、子どもからのドローイングが寄せられてきました。そのなかには、世界的に著名な建築家、ファッショングレーバーなどが含まれています。開館記念展「新たなる船出」において、サロンにこれらすべてのドローイングを展示了しました。

今治市内の小学校でも、この趣旨にご賛同をいただき、生徒たちに同じ呼びかけがなされ 700 枚のドローイングが集まりました。開館記念展では、16 期にわけて、これらのドローイングが同じサロンで全て展示しました。さらに、子どもたちのドローイングは仙台市宮城野区のみんなの家にも展示しました。また、せんだいメディアテーク（2011 年 7 月 29 日～9 月 1 日）、東京都現代美術館（建築、アートがつくりだす新しい環境—これからの“感じ”展 | 2011 年 10 月 29 日～2012 年 1 月 15 日会期中に一部展示）などで同時開催されました。

#### ◎ 「みんなの家」のコンセプトを描こう

2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災は日本がこれまで経験したことのない大きな被害を与えました。10 万人以上の人々が家を失い避難所や仮設住宅での生活を余儀なくされています。

避難所での暮らしはプライバシーもなく、寝泊りするスペースを確保するのが精一杯です。また仮設住宅での暮らしも無味乾燥なユニットの羅列に過ぎません。いずれもここでの暮らしは非人間的な極限状態の生活なのです。

しかしこのような生活においても、人間らしく生きたいと願う人々は、空き箱を食卓として笑顔で食事を楽しもうとします。或いは仮設住宅の狭間でミニコンサートを開こうとしています。極限状態でも人々は集まり、何らかのコミュニケーションを交わそうと試みる、そんな感動的な姿に私達は、最も原初的なコミュニティを見ることができます。そしてこのような場に最低限のかたちを与えることこそが建築の始まりと言えるのではないでしょうか。建築家ならばそうした食事やミニコンサートの場をもう少し人間的に、もう少し美しく、もう少し居心地良くすることが出来るはずです。

このような始原の建築を私は「みんなの家」と呼びたい。そして被災地の避難所や仮設住宅の間に、この「みんなの家」をつくりたい。それは謂わばベッドルームしかない家に共同のリビングルームをつくるような試みです。そこに行くと人々がソファやテーブルを囲んで語り合うことができ、またコーヒーを飲みながら本や新聞を読むことができる、そんな心の安らぎを得られる場所、それが「みんなの家」なのです。それはいかに小さくとも、家を失った人々が心のなかでなら抱くことのできる「私の家」に代わることがができるかもしれません。

さしあたりこの「みんなの家」はテンポラリーなものでしかありません。しかし復興が進む過程でそれは、恒久的な「みんなの家」に生まれ変わっていくかもしれません。人々が集まり、語り合い、そこから何かが発信され、創造されていくようなコミュニティのための建築が生み出されるかもしれませんのです。

このような「みんなの家」のアイデアを世界中の人々に描いていただけたら、どれ程被災地の人々を勇気づけることができるでしょうか。建築家や建築を志す学生達、さらには子供や被災地の人々などさまざまな人々のさまざまな「みんなの家」が「始原の建築」として建ち上がっていく風景を待望しています。

（「みんなの家」課題文より）

5 史料

5-1 伊東豊雄建築アーカイブ

5-3 伊東豊雄建築大型模型

5-2 大橋晃朗家具アーカイブ



伊東豊雄建築大型模型

シルバーハット内の、図書閲覧スペースに設けられた「伊東豊雄建築アーカイブ」は、伊東豊雄が選んだ約 100 件のプロジェクト図面を中心として収蔵しています。

保管図面は、初期の住宅から近年の大規模な建築や都市プロジェクト、さらには家具・食器・照明器具などのプロダクトデザイン、また展覧会や舞台デザインに至るまでを網羅し、コンペティション応募案を含んでいます。

プロジェクトごとに製本（建築プロジェクト図面）、またはファイリング（応募案およびプロダクトほか図面）され、シルバーハットの図書閲覧スペースに配架されています。内外の研究者・学生のため、広いデスクと落ち着いた学習・研究環境を準備されています。

◎アーカイブ 1…実施プロジェクト

1970-1979

千ヶ滝の山荘

黒の回帰

中野本町の家

ホテル D

PMT ビルー名古屋

小金井の家

1980-1989

笠間の家

シルバーハット

馬込沢の家

レストランバー・ノマド

横浜風の塔

神田 M ビル

サッポロビール北海道工場ゲストハウス

1990-1999

中目黒 T ビル

八代市立博物館・未来の森ミュージアム

湯河原ギャラリー U

ホテル P

松山 ITM ビル

下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館

養護老人ホーム八代市立保寿寮

八代広域消防本部庁舎

長岡リリックホール

横浜市東永谷地区センター・地域ケアプラザ

大館樹海ドームパーク

大田区休養村とうぶ

野津原町庁舎

祐天寺 T 邸

大社文化プレイス

2000-2009

大分アグリカルカルチャーパーク

せんだいメディアテーク  
ブルージュパヴィリオン  
サーペインタイン・ギャラリー・パヴィリオン 2002  
まつもと市民芸術館 vol.1・2  
アルミニコテージ  
TOD'S 表参道ビル  
アイランド中央公園中核施設設 ぐりんぐりん  
SUS 福島工場社員寮  
MIKIMOTO Ginza 2  
瞑想の森 市営斎場  
VivoCity  
コニヤック・ジェイ病院  
多摩美術大学図書館（八王子キャンパス）  
バルセロナ見本市・グランピア会場 拡張計画 vol.1・2  
トーレス・ポルタ・フィラ vol.1・2  
リラクゼーション・パーク・イン・トレヴィエハ  
座・高円寺  
SUMIKA パヴィリオン/SUMIKA PROJECT by TOKYO GAS  
高雄ワールドゲームス 2009 メインスタジアム  
スイーツアベニュー アパートメント ファサードリノベーション  
White O  
2010-  
カリフォルニア大学 バークレー美術館／パシフィック・フィルム・アーカイブ vol.1・2  
ベルビュー・レジデンシズ  
マドリッド・ガヴィア公園

◎アーカイブ 2…コンペ案、展覧会展示計画、デザインプロダクトなど  
1985-1989  
東京遊牧少女の包  
藤沢市湘南台文化センターコンペティション応募案  
フランクフルト市立劇場照明デザイン  
東京遊牧少女の包 2（トランスフィギュレーション展）ベルギーユーロバリア展覧会  
1990-1999  
日仏文化会館コンペティション応募案  
下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館コンペティション応募案  
アントワープ市再開発プロジェクト I サウス・ドックプロジェクト  
ヴィジョンズ・オブ・ジャパン展（シミュレーションの部屋）  
上海都市再開発計画 コンペティション応募案  
パリ大学図書館 コンペティション応募案  
アントワープ市再開発プロジェクト II  
長岡リリックホールコンペティション応募案  
大社文化プレイスコンペティション応募案  
大館樹海ドームパークコンペティション応募案

大田区休養村とうぶコンペティション応募案  
せんだいメディアテークコンペティション応募案  
大分アグリカルチャーパークコンペティション応募案  
野津原町庁舎コンペティション応募案  
ソウルドームコンペティション応募案 vol.1  
ソウルドームコンペティション応募案 vol.2  
テッサロニキ・ウォーターフロント再開発コンペティション応募案  
ローマ現代美術館コンペティション応募案  
伊東豊雄 | ブラーリングアーキテクチャ展  
コニヤック・ジェイ病院コンペティション応募案

2000-2009

ハノーバー2000国際博覧会「健康館」インスタレーション  
まつもと市民芸術館コンペティション応募案  
シンガポール・ブオナ・ヴィスタ地区 マスター・プラン・コンペティション応募案  
アイランド中央公園中核施設 グリーン・グリーン・コンペティション応募案  
バルセロナ見本市・グランピア会場コンペティション応募案  
マドリッド・ガヴィア公園コンペティション応募案  
スコットランド・Sプロジェクト vol.1  
スコットランド・Sプロジェクト vol.2  
ゲント市文化フォーラム・コンペティション応募案  
HORM・ファニチャー  
座・高円寺コンペティション応募案  
Escofet・アーバンファニチャー・"Naguisa"  
アレッシィ・テーブルウェア  
アレッシィ・テーブルウェア vol.2  
「フィガロの結婚」舞台装置  
高雄ワールドゲームズ 2009 メインスタジアムコンペティション応募案  
台中メトロポリタン・オペラハウス コンペティション応募案  
「ベルリン-東京/東京-ベルリン」展示場構成  
「伊東豊雄 建築 新しいリアル 東京オペラシティー」展  
Yamagawa・ライティング・"MAYUHANA"  
レ・アール 国際設計競技募集案  
「伊東豊雄：生成する秩序」展  
「風鈴」インスタレーション  
オスロ・ウェストバーネン再開発計画コンペティション応募案  
松山文化圏

2010-

うちのうちのうち-「建築はどこにあるの？ 7つのインスタレーション展」 -  
WAALSE KROOK vol.1  
WAALSE KROOK vol.2  
岐阜大学医学部跡地複合施設コンペティション応募案  
ボルドー ワイン文化・観光センターコンペティション応募案

## 5-2 伊東豊雄建築大型模型

### ◎収蔵作品

- ・「座・高円寺」模型 鉄製、1500w×1650d×800h (大三島美術館にて展示)
- ・「ミキモト ギンザ 2ビル」模型 鉄製 710w×710d×3010h
- ・「サーペンタイン・ギャラリー・パヴィリオン」模型 鉄製 1750w×1750d×100h
- ・「多摩美術大学図書館」模型 鉄製 3000w×3000d×400-600h
- ・「リラクゼーション・パーク・イン・トレヴィエハ」模型 鉄製 1350w×3800d×1000h

## 5-3 大橋晃朗家具アーカイブ

### ◎収蔵家具

大橋晃朗《椅子または台のようなイス／椅子ミリ》

1976年

サクラ材、黒着色、クリアウレタンラッカー塗装、籐編み

600w×365d×645h

大橋晃朗《椅子トゥム》

1978年

22mm、19mm径ステンレススチールパイプ、バフ仕上げ、灰色染め牛革張り

545w×480d×790h

大橋晃朗《ボード・ストゥール「バード・バッド」》

1981年

アルミコート合板、クリアソリッドラッカー塗装、一部銀ラッカー塗装

400w×400d×1044h

大橋晃朗《ボード・テーブル》

1981年

アルミコート合板、一部銀ラッカー塗装

1200w×1200d×500h

大橋晃朗《ボード・ストゥール No.2》

1984年

アルミコート合板、クリアウレタン半つや塗装、一部銀ラッカー塗装

400w×400d×1044h

大橋晃朗《フロッグ・チェア》

1985年

15mm径スティールパイプ、東レ・オペロン混ツイルエントラント張り、29mmスティールパイプ及び10mmスティールロッド、ラッカー焼付塗装

1323w×735d×1140h

- 6-1 建築教育と教育普及
- 6-2 講演会
- 6-3 子ども建築ワークショップ
- 6-4 ギャラリートーク
- 6-5 さまざまな活動



子ども建築ワークショップ「ハットにハットをつくろう」

今治市伊東豊雄建築ミュージアムは建築をテーマとしながらも、専門家だけではなく、今治市はもとよりミュージアムの立地する地域の人々や子どもたちが、身近な環境を問い合わせ、まちや地域コミュニティに働きかけていける学びを用意します。2011年度は、建築家などのゲストを呼んで開催する講演会、子ども向けの建築ワークショップ、その他の地域向けイベント、現在の活動は大きく分けてこの3種類で進めました。

#### ◎講演会

市内外の様々な立場の方に、建築やまちについて考えるきっかけの場とするために開催しています。2011年度は今治市中心市街地で2回開催しました。ゲストには、建築家だけでなくアーティストも呼び、より広い視点を導入しています。次年度以降も定期的に開催し、多くの方に建築やまちについて考える場所となるよう働きかけます。

#### ◎子ども建築ワークショップ

2011年度は2回のワークショップを開催しました。小学校の高学年を対象に、空間の観察力や想像力を育むプログラムとしました。次年度以降は、小学生高学年だけでなく、小学校低学年や中高生も対象とできるようにプログラムの開発に努めます。

#### ◎地域向けのイベント

サタデーナイトミュージアムは、閉館後の美しい夕景を見ていただきたいという思いで始まったイベントでしたが、プログラムに「TIMA意見交換会」を設け、地域の参加者からTIMAがどのようなことを期待されているかを知る機会にもしました。今後は、話し合うだけでなく、実際にまちを歩き、自分たちの身の回りの環境や歴史を再発見したり、何かを提案したりする活動へと展開したいと考えています。

#### ◎関連イベントとミュージアム活動の連携

伊東建築塾主催の建築ツアー（2012/3/3~4実施、香川県庁舎・香川県体育館・坂出人工土地・今治市庁舎、愛媛信用金庫等を周遊するツアー）では、最終見学地に、今治市岩田健母と子のミュージアム、今治市伊東豊雄建築ミュージアムというコースを組み、好評を得ました。また、アーキウォーク広島（註1）企画の「瀬戸内建築のたび」は、船で瀬戸内海の島を巡りながら、建築を見るというもので、見学地の一つとして入れていただきました。瀬戸内海は、その美しい風景とともに、名作と呼ばれる近代建築や注目されている現代建築も各地にあります。また来年は瀬戸内国際芸術祭、丹下健三生誕100年を迎えることとなります。このようなイベントとも連携し、さらに活動の幅を広げていきたいと思います。

※註1：アーキウォーク広島（アーキウォーク広島HPより、<http://www.oa-hiroshima.org/>）

私たちは、まず建築公開イベントや建築ガイドブック発行に取り組みます。これらの活動により、一般市民、すなわち建築の「使い手（利用者）」に建築・都市への関心を持って頂くだけでなく、建築の「作り手（設計者）」には素人目線での率直な感想を伝達し、「持ち手（所有者）」には所有する建物の価値をご理解頂き、さらに3者間のコミュニケーションを促進します。そして長期的には、この活動が広島の街そのものをより魅力的にする、きっかけとなることを目指しています。

## 6-2 講演会

◎開館記念トークセッション「アートと建築によるまちづくり」



開催日時：2011年8月21日（日） 14:00-16:00（開場13:00）

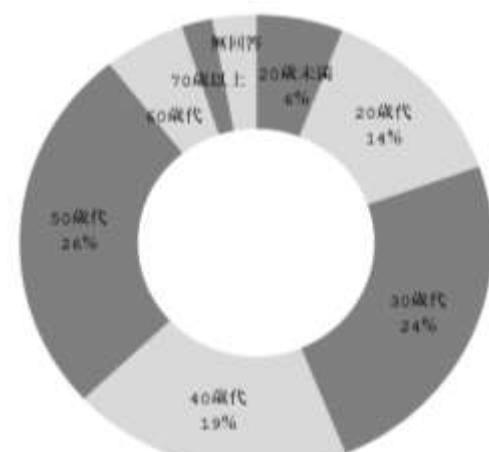
開催場所：今治市公会堂

講 師：伊東豊雄、日比野克彦、中野美奈子

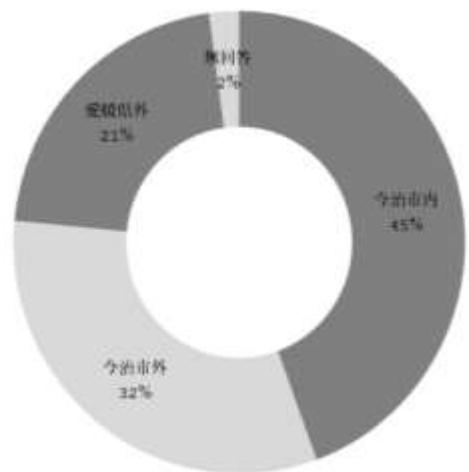
参加人数：284名

概 要：建築によるまちづくりワークショップに取り組む伊東豊雄氏、そして、アートによるまちづくりワークショップに取り組む日比野克彦氏が、今治市伊東豊雄建築ミュージアムから、これからの大三島、そして今治市における活動について語るトークセッションを開催する

来場者データ：



来場者年齢層



来場者居住地

アンケート記述（一部）：

- ・これからの今治市を元気にしていく、ヒントがあった（30代・男性・市内）
- ・四国では、有名建築家の話をきける機会がめったにないので、良い機会となりました（30代・女性・徳島）
- ・モノや建築をつくる意味や、目的を、多くの人々（被災地の人々を含め）に積極的に伝えようとする伊東さん、日比野さんの話を聞いて、とてもほげみになりました。（20代・女性・市内）
- ・ミュージアム開館にふさわしい夢の広がるトークでした。（60代・男性・広島）

註：シルバーハット図書閲覧スペースで講演会の記録映像を閲覧することができます。

◎建築セミナー「これからの建築、これからのまち」



左から伊東豊雄、小嶋一浩、末廣香織、曾我部昌史、太田浩史

開催日時：2012年3月3日（土）17:00-19:00（開場16:30）

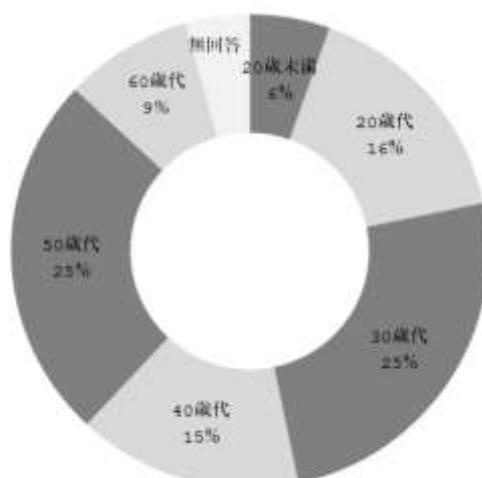
開催場所：旧今治コンピューターカレッジ 2F 多目的ホール

講 師：伊東豊雄、小嶋一浩、末廣香織、曾我部昌史、太田浩史

参加人数：120名

概 要：東日本大震災は技術においてすべての信頼をおいた近代以降の建築やまちづくりの方法に大きな波紋を投げかけました。即ち人間が自然環境を支配できるという信頼が揺らぎ始めたのです。私達はかつてのようにもっと自然と共生し、自然環境との親密な関係を回復しない限り再び大惨事を招きかねないのではないかでしょうか。また、自然エネルギーのりょうや、省エネルギー化への配慮、人と人の心の絆を深められるような建築やまちのあり方を話し合い、これからの建築やまちづくりの方向を探りたいと考えます。

来場者データ：



来場者年齢層



来場者居住地

アンケート記述（一部）：

- ・建築（建築家）、人とのつながりの大切さがよく理解できたからよかった。（40代・男性・松山）
- ・建築がアートとしてだけでなく、コミュニティをつくり出す、生活の基盤をつくり出すことに深く関わっていることを知ることができた。見た目やコンセプトでない、まちづくり視点で建築を考える方が身近でわかりやすかった。（20代・女性・市内）
- ・今後は、ミュージアムで住民（若者）が集まって今治というまちについて今後どうあっていきたいか等を話し合える会を開いて欲しい（20代・女性・市内）

註：シルバーハット図書閲覧スペースで講演会の記録映像を閲覧することができます。

◎夏休み子ども建築ワークショップ「建築探検隊」



開催日時：2011年7月31日 10:00-14:00

開催場所：シルバーハット ワークショップスペース

講 師：伊東豊雄、鈴木明、太田浩史

協 力：伊東豊雄建築設計事務所、東京大学太田浩史研究室、神戸芸術工科大学

参加人数：20名（釜石市立鵜住居小学校児童10名含む）

概 要：新しくオープンするミュージアムはふたつの特色ある建築「スティールハット」と「シルバーハット」からなっています。これらミュージアムの設計者、伊東豊雄さんといっしょに開館記念展と、それぞれ特徴的な建築と変化ある環境のなかを巡ります。ミュージアムの展示、建築の解説を聞いた後は、気に入った場所（環境）を探し出し、ラグを用いてピクニック（昼食）をします。昼食後には気に入った場所のスケッチをします。次は、特徴的なかたちをしている「スティールハット」のペーパーモデルを製作します。このペーパーモデルは切り取り線、谷折り、山折り、のりしろなどあらかじめ印刷してあるものを配布いたします。チューターが手助けしながら児童がモデルを立体にしていきます。出来上がったものはお土産になります。最後に、ミュージアムのキュレーター、設計や建設を担当したスタッフもみんなで車座になり、スケッチを元に、感じたことや興味をもつたことを話し合います。

アンケート記述（一部）：

- ・スティールハットの青い部屋の形が三角形など、いろんな形をしていて、びっくりした。（釜石市児童）
- ・スティールハットを見て、すごく変な形で最初はびっくりしたけど、それにすごい意味があって、印象に残りました。（釜石市児童）
- ・スティールハットの模型や今治市の風景などもスケッチできてたのしかった。今治の子とも仲良くできた。（釜石）
- ・スケッチで絵を書いて、いとう先生にほめられたことがうれしかった。（今治市児童）
- ・初めて会った、釜石から来た友達と色々話せたり、も形を作るときは今までやったことがなくて、とってもいい経験になりました。（今治市児童）
- ・スティールハットを作る時に、建物の仕組が分かって勉強になりました。（今治市児童）

## ◎子ども建築ワークショップ「ハットにハットをつくろう！」



開催日時：2012年3月4日（日）11:00-15:30

開催場所：シルバーハット ワークショップスペース

講 師：伊東豊雄、末廣香織、太田浩史、曾我部昌史

参加人数：8名

概 要：今治市伊東豊雄建築ミュージアムにはスティールハットとシルバーハット、ふたつのハットがあります。ハットとは小屋のこと。そのひとつ、シルバーハットは、ミュージアムを設計した伊東豊雄名誉館長の住んでいた家を、大三島でミュージアムのタテモノとして生き返らせたものです。伊東さんはこれまで、どんなタテモノをつくってきたのでしょうか？そして、伊東さんの家だったシルバーハットは、どんなタテモノだったのでしょう？伊東さんのお話を聞いてから、シルバーハットの中を、みたり、歩いたりして、みんなの居心地のよいところを発見してください。それから、みんなのハットをつくります。さて、みんなのつくるハットはどんなハットかな？伊東さんをおどろかせるぐらいステキなハットをつくりましょう！

### アンケート記述（一部）：

- ・ダンボールをじゅうにじゅうにのしくあそべたのでたのしかったです。
- ・ハットを作ること、みんなで協力できたことがたのしかった。
- ・スティールハットで伊東豊雄さんが説明してくれてわかりやすかった。
- ・楽しかったことはダンボールで家をつくったところです。いろいろな形のあなたをあけたりしたところもたのしかつたです。
- ・友達のハットとくっつけたところが楽しかったです。
- ・とまり（1ぱく2日）でやりたい。
- ・今度は、木で小屋をつくりたい。

11年度は、主に団体向けのミュージアムトークを30回実施しました。客層は、各地域の建築関連団体、大学・専門学校等の教育機関、今治市内団体などです。ミュージアムトークでは、スティールハットとシルバーハットの解説、展示の解説を行います。建築の解説では、伊東氏や施工者のインタビューを踏まえ、コンセプトや実現に至るプロセスを紹介します。展示の解説では、補助資料を用いて、伊東氏の建築のコンセプトについて専門用語を使わずに紹介します。

日本建築家協会  
 奈良県建築士会  
 愛媛建築住宅センター  
 愛媛県建築士協会  
 香川県建築士協会中三支部  
 香川県デザイン協会  
 徳島県建築士会女性支部  
 広島県建築士会広島支部  
 アーキウォーク広島  
 倉敷市役所  
 山口県建築士会  
 山口県住まいづくりの会  
 建築を語る会（鹿児島）  
 福山大学建築学科  
 名古屋工業大学  
 広島工業大学  
 河原デザイン・アート専門学校  
 久万美術館  
 (株)シアテック  
 台湾より学生ツアーア  
 台湾より建築ツアーア  
 今治市立美須賀小学校  
 今治市立上朝小学校  
 今治市法人会青年部  
 今治市広報広聴課主催ツアーア  
 今治市社会福祉協議会  
 大三島町・上浦町教員OB・OG会  
 宮窪デイサービス

注：ギャラリートークの申込みがあった団体のみ掲載しています。他にも事前申込みのなかったギャラリートークを同程度実施しました。

◎吉田未玲氏建築セミナー

開催日時：12月20日（火） 10:30-12:00 (12:00-13:00懇親会、13:00-14:00ギャラリートーク)

開催場所：シルバーハット 図書閲覧スペース

講 師：吉田未玲（建築家、ROM for art and architectureキュレーター）

参加人数：30名

ノルウェー・オスロ在住の建築家・キュレーターである吉田未玲氏の来日に合わせて、北欧の建築事情について話していただきました。ノルウェーの建築家 Odd Østby を中心に、その建築理念や教育理念について講演を行いました。当日は昼食を兼ねた懇親会で講師との交流を深め、午後からギャラリートークを行いました。質問には、建築のことだけでなく、北欧の住宅事情や生活状況なども話にあがりました。



チラシ



左：講演、右：ギャラリートーク

◎サタデーナイトミュージアム

開催日時：2011年10月15日、11月5日

開催場所：伊東豊雄建築ミュージアム

参加人数：毎回10人程度

「閉館後の夕日を見たい」という要望を受けて、始まった企画です。内容は、第1部でミュージアムツアーを行い、第2部でTIMA意見交換会を行います。ミュージアムツアーでは、展示されている模型に加え、タブレット端末やA3資料を用い、建築のコンセプトや特徴をできるだけビジュアルで示し、解説を行います。TIMA意見交換会では、TIMAの設立経緯や概要、今までの活動や入館者の特性などを伝え、意見を交換します。意見交換のテーマは第1回が「TIMAのこれからに期待すること」、第2回が「TIMAは子どもに対して、何ができるか」でした。建築関係者、エターン者、高齢者、子供など多様な地元の参加者が来てくれました。



左：第1回チラシ、右：第2回チラシ



左：TIMA意見交換会、右：ギャラリートーク

- 7-1 広報活動について
- 7-2 ホームページ
- 7-3 「TIMA 通信」の発行
- 7-4 「FM ラジオバリバリ」番組制作
- 7-5 掲載された雑誌、ウェブ等



今治市伊東豊雄建築ミュージアムについて、利用者層の想定とそれに基づく内容および方法によって広報活動を行いました。ミュージアムのテーマは建築であり専門性が高いため、建築関係者（建築家、デザイナーや建築系学生…国内外に広域に存在）と、おもにミュージアムの立地する近隣、大三島の近隣居住者、および今治市の周辺の子どもを含む居住者層と、大きくふたつの層として捉え、広報内容の整理と実践を行いました。

◎国内外の建築関係者、美術関係者

ポスター、チラシ、パンフレットを作成し、全国の美術館や建築関連学部・学科を持つ大学に送付しました。また、ホームページ、カタログは、英語対訳を掲載し、国外にも発信できるものとしました。ポスター、チラシの頒布先は以下の通りです。

1. ミュージアム近隣の公共施設など…46ヶ所
2. 今治市内の公共施設など…111ヶ所
3. 建築関連学部、学科を持つ大学研究室… (212ヶ所)
4. 美術館…120ヶ所
5. 報道関係…30ヶ所

◎近隣居住者

美術館広報誌「TIMA 通信」の発行、今治のコミュニティ FM 「FM ラヂオバリバリ」 の番組制作を通して、地域に密着した情報発信を行いました。

開館記念展においては、オープニング式典に先立って、地域住民の来館を促すことができるようジャーナリスト向けの記者発表を行い、展覧会趣旨およびミュージアムの活動についてわかりやすい解説を盛り込んだ、事前発表や事前見学会を行いました。また、国内外向けに、英語にも対応したデータのプレスキットを作成して、要望があった場合に送付しました。

ポスター及びチラシは、畠山直哉氏撮影によるクオリティの高い大判の写真を主体とし、建築性（デザイン性）、敷地環境や景観などインパクトのある現地をアピールするデザインとしました。情報は簡潔にまとめ、チラシ (A4)においては裏面にさまざまなイベントの概要を配しています。カタログも含めてすべての印刷物のデザインを松田洋一氏に依頼し、情報とイメージの統一を図りました。



## 7-2 ホームページ

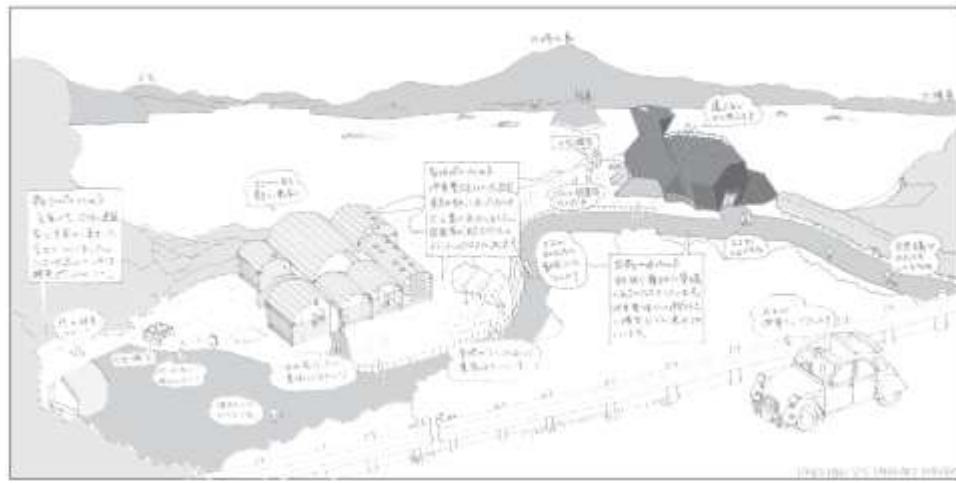
開館に合わせて、ホームページを開設しました。ホームページはtwitter・FacebookといったSNSと連動しており、創発的な情報発信を行えるように整備を行なっています。基本的な情報の他に「建築都市情報（ブログ）」を設置し、建築ミュージアムに関するコラムやミュージアムの活動報告を行いました。



トップページ

## 7-3 「TIMA通信」の発行

「TIMA通信」は、主に今治市民向けに編集を行うミュージアムの広報誌です。イラスト等を用いて、ミュージアムの魅力や事業をわかりやすく伝えることが目的です。11年度は10月に1回発行し、大三島町に配布を行う今治市広報誌「広報今治」に本誌を挟み込み、大三島町ほぼ全世帯に配布を行いました。図書館等にも配架を行いました。今後も必要に応じて発行を行う予定です。



TIMA通信内のイラスト

今治のコミュニティ FM 「FM ラヂオバリバリ」にて番組制作を行いました。毎週月曜日 7:15～7:30（再放送は毎週金曜日 11:15～11:30）に放送しています。番組の構成としては、建築の専門家だけでなく、広く一般の方々に理解していただけるよう、瀬戸内海や四国の建築など身近なトピックを分かりやすい言葉で伝えるよう工夫をしています。

◎瀬戸内海・四国・中国地方の建築

- 2011年10月17日 『坂出人工土地』（大高正人）
- 2011年12月19日 『亀老山展望台』（隈研吾、1995）
- 2011年12月26日 『佐木島プロジェクト』（鈴木了二、1995）
- 2012年1月9日 『直島銭湯』（大竹伸朗、2009）
- 2012年1月16日 『海の駅なおしま』（SANAA、2006）
- 2012年1月23日 『島根県芸術文化センター』（内藤廣建築設計事務所、2005）
- 2012年2月20日 『松山ITMビル』（伊東豊雄）
- 2012年2月27日 『伊丹十三記念館』（中村好文）

◎子どもと建築、みんなでつくる建築

- 2011年10月10日 『ひろしまハウス』（石山修武）
- 2011年10月31日 『邑楽町役場コンペ案』（山本理顕）
- 2011年12月5日 伊東豊雄建築ミュージアムでの今までの取組み
- 2011年12月12日 フィンランドの建築学校「Arkki」の紹介
- 2012年3月12日 広島市現代美術館「ペリアンさんをおもてなし」ワークショップ
- 2012年3月19日 伊東豊雄建築ミュージアム「ハットにハットをつくろう！」ワークショップ

◎伊東豊雄の建築

- 2011年10月3日 『シルバーハット』（伊東豊雄、1984）
- 2011年10月24日 『スティールハット』（伊東豊雄、2011）
- 2011年11月7日 『せんだいメディアテーク』（伊東豊雄、2001）
- 2011年11月14日 『みんなの家』（伊東豊雄、2011）
- 2012年1月30日 『岩田健母と子のミュージアム』（伊東豊雄、2011）
- 2012年2月6日 『Ripples』（伊東豊雄、2003）
- 2012年3月26日 伊東豊雄建築ミュージアム「これからの建築、これからのまち」セミナー

◎その他

- 2011年11月21日 『現代都市のための9か条』（西沢大良、新建築2011年10月号）
- 2011年11月28日 『自由な建築 既存の概念から解き放たれた先にあるもの』（石上純也、新建築2011年1月）
- 2012年2月13日 『ボード・ストゥール』（大橋晃朗、1981）
- 2012年3月5日 広島市現代美術館「シャルロットペリアンと日本」展

以下に掲載された主なメディアを一部紹介します。世界各国から取材及び写真提供の依頼がありました。

◎新聞

- ・7月29日（金）日刊建設工業新聞 「今治市伊東豊雄建築ミュージアム 濱戸内から建築文化発信」
- ・7月30日（土）愛媛新聞 「建築を考える場に 伊東豊雄ミュージアム落成」
- ・7月31日（日）読売新聞 「建築美術館 今治にオープン 伊東豊雄さん設計、模型など展示」
- ・8月1日（月）愛媛新聞 「安らぐ建築 共に学ぼう 被災地児童招き交流」
- ・8月1日（月）読売新聞 「釜石の小6 建築博物館招待 今治市「復興に役立てて」
- ・8月12日（金）読売新聞 「震災が問う 建築の役割 伊東豊雄建築ミュージアム開館」
- ・3月5日（月）愛媛新聞 「興奮 自分だけの小屋 今治の児童 建築家らとダンボールで制作」

◎タウン誌他

- ・中国新聞メセマガ 特集「涼を求めて水辺へドライブ」（8月5日発行）
- ・新美術館新聞 「今治市伊東豊雄建築ミュージアム」開館（9月11日発行）
- ・週刊愛媛経済レポート 「月曜訪問 今治市伊東豊雄建築ミュージアム」（9月19日発行）

◎建築専門誌

- ・GA JAPAN 113 (エーディーエー・エディタ・トキヨー)
- ・新建築 2011.9 (新建築社)
- ・JA 83 (新建築社)
- ・JA 84 (新建築社)
- ・日経アーキテクチュア 2010-1-25 (日経BP社)
- ・日経アーキテクチュア 2011-8-25 (日経BP社)
- ・ディテール 191 (彰国社)

◎その他雑誌

- ・BRUTUS 727 (マガジンハウス)
- ・Casa BRUTUS 139 (マガジンハウス)
- ・Pen 10月号 (阪急コミュニケーションズ)
- ・GQ JAPAN 2011.10 (コンデナスト・ジャパン)
- ・icon 2011.10 (icon、イギリス)
- ・ABITARE 2011.10 (ABITARE、スペイン)
- ・C3 No.327 (C3、韓国)
- ・MARK 2011.12 (Frame Publisher、オランダ)
- ・architecture Asia issue 3 jul/aug/sept 2011 (Pusat Binaan Sdn Bhd、マレーシア)
- ・CASA DA ABITARE 46 2011/12 (Editrice Abitare Segesta 芸術与設計、中国)

◎ウェブサイト

- ・10+1 Web site (<http://10plus1.jp/monthly/2011/09/post-28.php>)
- ・ケンプラツ (http://kenplatz.nikkeibp.co.jp/article/building/news/20110823/551389/)
- ・excite ism ([http://ism.excite.co.jp/architecture/rid\\_E1312359314005/](http://ism.excite.co.jp/architecture/rid_E1312359314005/))
- ・準建築人手帳 (中国) (<http://forgemind.net/phpbb/viewtopic.php?t=16825>)
- ・Designboom (<http://www.designboom.com/weblog/>)

その他、スイス、ドイツ、韓国など掲載多数。

註：リストは2011年7月30日のオープン以降の掲載先から一部を抜粋しています。

## 8 調査・交流

8-1 建築ミュージアム、建築アーカイブの調査と交流

8-2 世界の建築ミュージアム

近年、建築ミュージアムや建築アーカイブへの関心が高まっています。歴史的に建築が文化的な資源として位置づけがなされている西欧に比べて、わが国では近代建築の導入以降、建築は工場や機械と同じく、生産性や効率から機能を全うする施設として建てられ（ビルト）、その役割を終えた時に廃棄（スクラップ）される「モノとしての評価」しか認められずに来ました。

しかしながら、わが国においても歴史的な建築物、街並、明治期に導入された西洋建築などに加えて、いわゆる近代建築についての文化的な意味、建築的な価値が認められるようになってきています。老朽化したからといつてすぐに建替えるのではなく、その保存と活用について議論を行ったり、さまざまなかたちでの保存、復元がさかんになってきています。

建築史家を中心にして、このような近代建築の調査研究を行っていますが、文化的な位置付けと一般に対する認知と啓蒙を、さらに図面や模型など資料保存や資料の編纂など、多面的な活動が進められるようになってきています。近年、「日本における建築アーカイブズの構築」といった具体的な目標のもとに、資料収集と研究、シンポジウムなどを通じて普及がはかられてきています（註1）。

2011度だけでも、「坂倉準三展」「シャルロット・ペリアン展」「メタボリズム展」など、一般の美術館などにおいて建築関連の大規模な展覧会が相次いで開催され、その展示とともにアーカイブに基づいた研究発表や出版が数多く行われています。

また、一方では「子どもの建築ワークショップ」などの活動もさかんになってきており、2011年度には建築や建築文化の普及を行う団体や施設に対しての表彰「ゴールデンキューブ賞」（註2）が始まりました。

このような機運と背景のもと開館した伊東ミュージアムですが、オープンに向けて伊東豊雄主宰の伊東建築設計事務所の協力により、過去の建築作品の図面、資料などを収蔵することができました。そのアーカイブとしての編纂（資料の研究と公開・出版など）と、活用はまだその端緒についたばかりです。

特に、欧米の建築アーカイブや建築ミュージアムにおける、展覧会を通じての資料公開やアウトリーチを通じての啓蒙などの実体を探ることを目的として、ウェブサイト上で調査報告を行いました。次年度から視察や活動情報の交換などの活動の基礎的な調査です。

#### \*註1

『日本における建築アーカイブズの構築に向けて』（社）日本建築学会建築アーカイブズ小委員会、2007年3月

#### \*註2

「ゴールデンキューブ賞」JIAによる公募と活動への表彰。2011年度第1回開催、伊東豊雄が審査委員長を務めた。

◎世界の建築ミュージアムその1

…オランダ建築協会 NAI: Netherlands Architecture Institute

by 鈴木明 on 2011年9月14日

NAI（ナイ）と呼ばれるこの施設は、訳語だと「オランダ建築協会」と硬い。むしろオランダ建築ミュージアムとでも呼ぶにふさわしく、その活動は、建築アーカイブ（建築資料の編纂、収集、収蔵）はもとより、かなりとんがつた現代建築や都市の展覧会、シンポジウムやレクチャーシリーズを開催、さらにさまざまな出版などを行う、それも専門家向けだけではなく、子ども向けから大人向けまでプログラムを用意する、まさにマルチディシプリナル（多彩）な組織、場所である。

1993年にオープンした建築の設計者はオランダの建築家ヨー・クーネン。コンペで選ばれた。建築の特徴は、収蔵庫を収める円弧上の長い棟、オフィスが入るガラスの鳥かご、そして展示空間を収める中心部とそれをはつきり分節し、その間には大きな池を配していること。1990年代に、アムステルダムとは異なった近代建築を基盤とする都市中心部の再生プロジェクトの一環としてある、この一帯をミュージアムパーク整備のなかで、企画された施設である。

だから、ここを訪れるときは、現代美術では外せないポイスマン・ヴァン・ベニンゲン美術館やコースハース設計によるクンストハルなどを合わせて見学する時間を確保しなければならない。なにせ、NAIの半券で保存された1930年代の近代住宅、ゾーンフェルト美術館（プリンクマンほか設計）も見学できるし、最近、池の向かいに「NAI CAFE」という WiFi環境を備えた、フリーランス建築家が仕事しながら、世間話をするのに最適なカフェがオープンしたくらいだから。

筆者は、子どもを対象としたワークショップでNAIに滞在した。そこで見聞を少しだけ紹介したい。

NAIには定期的に小学生が訪れる。地域の学校と連携したプログラム、いわゆるギャラリーツアーは「建物喰いモンスター・ハンター」がある。参加者はまず、地下でモンスターが基礎部分を喰われた近代集合住宅破壊の映像を見られ、ハンターキット（ルーペや双眼鏡などが入ったポーチ）を持たされる。続けて、NAI館内をグループで探検するが、たしかに館内の壁にトリの足跡があつたり、基礎部分（メンテ用の扉を開けると）が喰い散らかされたり、たしかにこの建物にはモンスターが生息していることを証明する痕跡が各所に見られるのだ！このプログラムはNAIのキュレータ（児童教育専門）たちが、数年をかけてつくった教育プログラムであり、それは決して建築の専門教育だけをめざしたのではなく、ひろく市民が建築に対して関心をもつきっかけを示すようなつくりである。メインの展示空間につづく「ハンズオンデッキ（HANDS-ON DECK）」では、演劇集団などの指導を受けながら、子どもたちが芝居の創作と発表を行ったりしている。

地下にあるワークショップ（工房）では、大規模な展覧会の展示物の設営を行うが、これらさまざまなアクティビティのための工作物や残骸があつて結構楽しい。スタッフもこのような多様なアクティヴィティから、キュレーターや建築家のとんでもない注文に応えることになれていて、筆者が自転車のチューブを二十本と注文したら、翌日に用意してくれていたくらいだ。このようなパックボーン（スタッフの多様な構成も含めて）がしっかりとつくられているからこそ、市民に対して建築の文化や思想を、わかりやすく聞くことができるのだろう。

アーカイブのセクションは、これらパブリックな活動とは対照的に学究的である。長い円弧上の棟を歩いていて、日本のモダニズム時代の有名な建築模型などを発見して驚いた。これらはあらためてじっくり見学に行きたいところ。NAIで開催された展覧会のひとつ「日本／トータルランドスケープへ向かって－現代日本建築・都市計画・ランドスケープ展」は、アムステルダム在住の建築家吉良森子さんやYGSAの寺田真理子さんがキュレーションや準備のスタッフとして働くなど、日本人建築家たちとの結びつきも強い。オランダにお出かけの際は、ぜひ、訪れていただきたいスポットである。

「ロッテルダム建築自転車ツアー」なんていうプログラムはTIMAでもやってみたい。参考となる活動が盛りだくさんなミュージアムである。

◎世界の建築ミュージアムその2

…デンマーク・デザインミュージアム Design Museum Denmark

by 鈴木明 on 2011年10月22日

首都、コペンハーゲンの中心部にあるデザインミュージアムはモダンファニチャーを推進した、デンマーク家具デザイナーのコレクションを収蔵公開するだけでなく、歴史的な家具、室内をはじめさまざまな応用芸術、工業デザインのプロダクトをも集める世界的にも希有なアーカイブである。だからといって、研究者やデザイナーに向けたこ難しい雰囲気ではなく、学生・観光客が必ず訪れる観光スポットになっている。世界でいち早く歩行者に通りを開放したストロイエ通りを抜け、近年、オペラ劇場や音楽ホールで再開発が進む港湾に向かって進み、王宮を過ぎると、クラシックな門構えとペディメントを持った建築が姿を現す。1890 年に組織されたミュージアムは、1926 年、ロココ様式のフレデリック王立病院に移り、ここを本拠として現在に至る。広い中庭を囲んだ二階建て、ゆったりとした回廊型の病院平面は、博物館の展示空間と相性がよく、来館者にとって内部を巡った後元に戻り、入り口脇のカフェでサンドイッチとコーヒーを求め、こりを携えて、庭のテーブル席でひと息つくにはもってこいの環境である。さて、筆者は今年（2011 年）6 月に「Danish Design I like it! Jasper Morrison」展を見に行った。モリソンが英国を代表するもっとも現代的な家具デザイナーであることにお気づきの方もおられると思うが、ここではポール・ケアホルムやハンス・ウェグナー、ボルグ・モーエセンといったデンマーク近代家具の古典的デザインを扱う展覧会だけではなく、国際的で現代的な企画も数多く開催されている（12 月からは安藤忠雄のドローイング展が予定されている）。常設展示は時代と地域ごとに部屋が割り当てられており、当時の室内の雰囲気がそのまま再現される。来館は時間の余裕をもって臨みたい。自由に利用できる図書館の参考書籍も充実している。

なお、図面、ドローイングのアーカイブを閲覧したいときは予約が必要である。

### ◎世界の建築ミュージアムその3

…ROM for art and architecture オスロ（ノルウェー）

by 吉田未玲 on 2011年11月21日

ノルウェーの首都オスロは人口約140万人、コペンハーゲンと比べ若干大きいが、現在ヨーロッパの中で人口増加率が一番高いことで有名な都市である。一つには油田産業や水産業もたらす安定した経済状況を背景に経済移民が多いという実態がある。もともと人口が少ない上、北南に長くのびる地形の国であることから、こうした移民がいなければ国が機能しないともいわれる。そんな豊かな国としての印象がある北欧ノルウェー国だが、70年代のオイルショックとそれと共に価格が上がった北海油田が富をもたらす前までは大変貧しい国であった。つい20年前までは、お風呂やトイレがついていない住宅も多く、労働者階級の多く住んでいたオスロ東地域には、かつて共同浴場としてつかわれていた建物をいまでも見かける。現在、こうした建物はコミュニティセンターなどに改装され、工場街は姿を消してしまったが、今日に至るまでそうした跡地にたくさんの文化施設や学校が建てられた。オスロ建築学校(Arkitektur- og designhøgskolen i Oslo)、建築デザインセンター(Norsk Design-og Arkitektsenter)、OCA(Office for Contemporary Art Norway)そして私がプログラムダイレクターとして働いているROM for art and architectureもこの地域にある。特にAkerselva河川に沿って並ぶこの工場街一帯は保存、再開発がなされて、現在アーティストのアトリエやギャラリー、そして建築デザイン・アトリエなどが建ち並ぶとても魅力的な地域になっている。

さてここオスロには現在建築に関してのギャラリーや美術館が大変多い。ノルウェー建築美術館をはじめ、建築デザインセンター、ギャラリー0047、そしてROM for art and architectureと建築を専門とするギャラリーが4つもある。小さな都市の利点かもしれないが、この4つのすべてが徒歩10分程度の範囲にある。またオスロには、ノルウェー建築家協会(NAL)の他に建築デザイン基金(Norsk Form)、そしてオスロ建築家協会(OAF)という組織があり、それぞれ建築やデザインに関する講演会やイベントプログラムが年間を通じて企画されている。余談になるが、今年の夏に第6回オスロ国際建築トリエンナーレが開催された。今年は、Year of Architectureと呼ばれノルウェー建築家協会設立100周年記念として大規模な建築祭も行われた。つまり我々オスロに住む建築家にとつてお祭りだらけの年であったといつてよいかもしれない。

話は戻り私の働くROM for art and architectureを少し紹介したい。我々のギャラリーはもともと昔のジャム工場の敷地内にあった建物を改装したもの。2005年から建築家と空間芸術家によるインスタレーションを行うギャラリーとして使用されている。約240m<sup>2</sup>程度のシンプルなスペースではあるが、フルスケールのパビリオンの設置から、コンサートまで多種多様なインスタレーションを行ってきた。ROMはもともと二つの組織、建築専門ギャラリー(Gallery ROM)と空間芸術のギャラリー(Institute for Spatial Art)の合併から現在のスタイルつまりアートと建築をコンパインする形が始まった。こうしたギャラリーはデザイン大国北欧においても珍しく、現在ROMはノルウェー国内ではなく北欧を中心としたクリエイティブなコミュニティを支える重要な存在になっている。

2007年にはフィンランド出身の建築家Sami RintalaによるBOXHOMEと呼ばれる仮設のパビリオンを設置し、日本からもたくさんの方々に見に来ただいた。(残念ながらパビリオンは2008年にTromsø近郊に移設された)。今年の秋にはスペイン建築家Juan Herrerosの展示を行い、オスロ沿岸地区に建設予定の美術館とその都市計画デザインについてのインターナショナルカンファレンスを行った。来年2012年の春には、スイス建築写真家Hélène Binetによる展示が行われる。今年の初めにノルウェー北部フィンマルク地方に完成したPeter Zumthorによる魔女狩りの記念館の建物を中心に展示を行う予定である。

ノルウェーを旅行する際、一つ注意していただきたいのは、夏休みの7月とクリスマス休暇のある12月は閉まってしまうギャラリーも少なくない事。美術館やギャラリーに限らず訪れたいと思っている建物などがある場合、必ず開館時間など電話やメールで確認した方がよいであろう。これは人口密度が少ない小さな都市の欠点である。またオスロの冬は雪が深く午後4時には暗くなってしまう。建築を見に来るのであればやはり春か秋がよいだろう。オスロでは毎年9月の週末(不定期)にオープンハウスが開催され、このイベントが開催される週末をはさんで来ることができれば普段は観れない住宅の内部を見ることができる。

## ◎世界の建築ミュージアムその4

…FRAC Archilab オルレアン（フランス）

by 鈴木明 on 2012年2月16日

フランス・オルレアン市はパリから 130km、電車で 2 時間ほど、歴史はローマ時代にまで遡ることができるロワール河畔に築かれた古都。ジャンヌ・ダルクがイングランド軍の包囲から解放した町といえば、ああと思い出す人もいるかもしれない。だが、中世の家並と石畳の道からなるまちに世界の現代建築をリードする建築センターがある、と言われてもにわかには信じられないだろう。ARCHILAB（アルシラブ）と FRAC（ブラックセンター）はそんな町の中心部にある。

とはいものの、2006 年開催の ARCHILAB 展のキュレータ（寺田真理子と筆者の協働）としてここに通い詰めた当時は、現代建築とは縁のない 19 世紀建造の兵舎を利用していた。ところが近年開催されたコンペによって超現代的な建築が中庭を埋め尽くしあげてきている。来年の完成を目指して、煉瓦造の兵舎を飲み込まんばかりの勢いで工事が進んでいるようである。

ところで、ARCHILAB と FRAC と並んで呼んでいるが、これは別の組織というか概念である。そのことの説明から始めなくてはならない。FRAC はフランス文化省が国内諸都市に芸術や建築などのアーカイブを分散させて配置する政策によってオルレアンに設置された建築アーカイブ（1983 年開設：マリ・アンジェ・ブライエとフレデリック・ミゲリューがディレクター）。現在は、ロワール川にほど近いシャッターのしまったガレージのごとき建物がそれ。通常はモダニズム以降の建築図面やドローイング、模型など膨大な資料の編纂、修復、調査を主に 2 階の小さなスペースで行い、年に数回、建築家やアーティストの展覧会やイベントを 1 階吹抜け空間で開催する。一方、ARCHILAB は年に 1 回開催される特定のテーマとタイトルからなる大規模な企画展の名称（註 1）であり（1999 年に第 1 回を開催）、そのためのテンポラリーな準備組織である。展覧会自体は旧兵舎の空間をほとんどすべて使って開催してきた。といふいきさつを持つが、いよいよ来年（2013 年）から、このふたつの組織がさきの兵舎と中庭を埋め尽くす異様な建築によってひとつに統合され、3,000m<sup>2</sup> の同じ場所、スペースで活動することになる。1,600m<sup>2</sup> の企画展示スペース、400m<sup>2</sup> のワークショップやアーカイブ閲覧のためのスペースが確保され、より一般への公開性を高めるという（こういっては何だが、TIMA のスティールハット棟（異様なかたちといったら失礼だが）とシルバー哈ット棟との関係と同じような使われ方がはじまるのかもしれない）。

註 1:2004 年に森美術館で開催された「アーキラボ：建築・都市・アートの新たな実験展 1950-2005」は、FRAC センターのアーカイブに基づいた展覧会であり、正確に言うと、ここでいうアーキラボではない。また、フランスでは「アルシラブ」と発音する。

<http://www.frac-centre.fr/>

## ◎日本の建築ミュージアム

…京都工芸繊維大学美術工芸資料館

by 伊東建築塾 on 2011年9月15日

松隈洋さんが勤める、京都工芸繊維大学美術工芸資料館には、主要な建築資料として、建築家・村野藤吾（1891～1984 年）の実施設計図を中心とする図面類、約 2 万 8 千点が所蔵されている。ここでは日常的な建築資料の整理と収藏という活動と、それらを外部へ発信する展覧会とそれを機に図録を作成するという対照的な活動を行う。10+1 web site では、松隈洋さんが「より良き建築文化の土壤を築くために一建築アーカイブから見えてくるもの」と題して、アーカイブの意味と役割について、さらに大学にこのような施設があることの意義について語っている。

<http://10plus1.jp/monthly/2011/09/post-29.php>

## 9 その他の活動

- 9-1 ミュージアムグッズの開発・販売
- 9-2 VI (ビジュアル・アイデンティティ) の制作
- 9-3 建築空間と活動



## 9-1 ミュージアムグッズの開発・販売

ミュージアムグッズとして、以下のものを開発し、スティールハットのエントランスホールで販売をしました。

- ・カタログ
- ・タオル
- ・クリアフォルダ（黒・白）
- ・DVD（販売は2012年度から）

上記の他にも、特定非営利活動法人ハートフル・ジャパンが制作を行なっている伊東豊雄デザインの缶バッジを販売しました。今後は、伊東豊雄関連の書籍、11年度に制作を行ったDVDの販売を行い、ミュージアムショップの充実を図ります。



写真左：カタログ、写真右：ハートフル・ジャパン缶バッジ販売風景

## 9-2 VI（ビジュアル・アイデンティティ）の制作

ミュージアムの効果的なブランディングのために、VI（ビジュアル・アイデンティティ）を作成しました。デザインは廣村デザイン事務所に依頼を行いました。デザインを行ったものは以下のとおりです。

- ・ロゴデザイン
- ・封筒
- ・名刺
- ・紙フォルダ
- ・ビニル袋
- ・クリアフォルダ（販売用）
- ・タオル（販売用）
- ・ミュージアム内のサイン



シルバーハットは、内外の研究者や学生のために一般公開されたスペースです。広いデスクと落ち着いた学習・研究環境が整っている図書閲覧スペースには、伊東豊雄が選んだプロジェクト図面や関連書籍が開架されています。また、半屋外のワークショップスペースでは、ミュージアム主催のイベントの他、建築系のイベントを開催できるよう貸出を行っています。

◎図書閲覧スペースの運営と利用状況

ミュージアムでしか見ることのできない貴重なアーカイブは、本館の特徴の一つとなっています。11年度の実績としては、アーカイブを目的に大三島に数日滞在し研究を行った学生が1名のみでしたが、今後は大学などの研究機関への広報を強化し、利用を促進したいと考えています。現在の利用状況としては、来館前からアーカイブの存在を知っている方が少ないため、周知を効果的に行い、滞在時間を確保していただけるよう働きかけを行います。

他にも、伊東豊雄関連書籍を中心に、同世代の建築家の書籍や専門誌なども閲覧できるように準備を進めています。11年度は、伊東豊雄建築設計事務所より多数の書籍を寄付していただき、資料が揃いつつある状況です。来年度以降もアーカイブの追加と関連書籍の収集を進め、より充実した学習・研究環境を整備していきます。

◎ワークショップスペースの運営と利用状況

かつて、都市に建つ住居のリビングルームの一部として活用されていたシルバーハットのテラスが、用途を変えて、ワークショップスペースとして開放されています。現在は、主にミュージアム主催のイベントや団体客への説明等に利用しています。貸出も行っていますが、11年度の実施は1件のみでした。

今後は、大学や専門学校・近郊の建築士会などへ、ワークショップスペースの貸出を行っていることを周知し、利用の促進を図っていきます。ワークショップスペースは半屋外空間であるため雨天時の対応を考慮する必要がありますが、利用時の交通手段なども含めて、分かりやすく利用方法をホームページ等で広報していきます。

10-1 来館者数と動向

10-2 組織

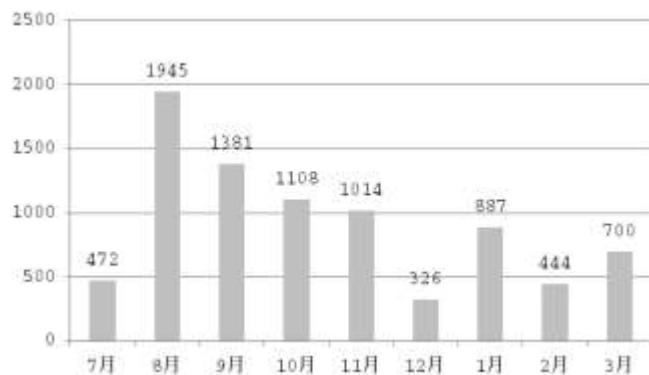


ミュージアム敷地内でピクニックをするカナダからのお客様

## 10-1 来館者数と動向

### ◎来館者数

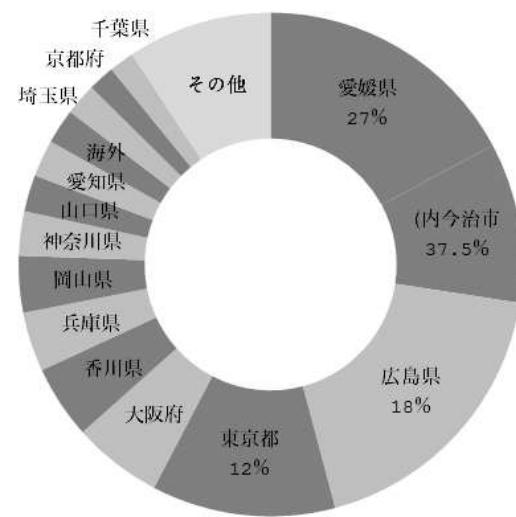
2011 年度の来館者数は以下のグラフの通りです。12月以降はオープン直後の 8月と比べて約 5~8 割減少しています。本館では、年末 (12/27-12/31) に休館とし、1月 1日から開館していることも影響していると思われます。<sup>1</sup>



来館者数 (2011 年 7 月 30 日～2012 年 3 月 31 日)

### ◎来館者地域属性

来館者の地域属性 (上位 15 都道府県) は以下のグラフの通りです。しまなみ海道を結ぶ愛媛県と広島県で約 5 割を占めています。その後は、東京都・大阪府などの大都市圏、香川県・岡山県などの近隣県が並びます。



来館者地域属性 (2011 年 7 月 30 日～2012 年 3 月 31 日)

註：来館者地域属性はシルバーハット図書閲覧スペースで実施している芳名帳をもとに算出

2011年度の運営体制は以下の通りです。

◎株式会社伊東豊雄建築設計事務所

(伊東豊雄、泉洋子、古林豊彦、岡野道子、近藤奈々子、高池葉子、山田明子)

- ・展覧会（企画・常設）企画、展示デザイン、制作

◎特定非営利活動法人 これから建築を考える

(鈴木明、下平わか奈、増田祐子)

- ・企画展印刷物制作

- ・講演会、セミナー、ワークショップなどイベント企画運営

◎今治市文化振興課文化振興係

名誉館長(1) …伊東豊雄名誉館長、非常勤。

館 長(1) …今治市教育委員会大三島地域教育課長兼務。管理運営の統括。

|- 専門員(1) …教育普及に関する調査研究や資料収集、保管管理、館内案内などの施設管理全般。

|- 嘱託職員。

|- 受付案内(1)…受付業務。(近隣の大三島美術館、ところミュージアム大三島、岩田健母と子のミュージアムを合わせた4館を複数人でローテーション勤務。アルバイト職員。)

協力：

[展示・ワークショップ]

青陽孝昭建築設計工房(青陽孝昭)

[展示]

広島大学千代章一郎ゼミナール(塙野路哉、夏天、市川研二、山田恭平、平尾慶太、渡辺桃子、才田遙、森貞絵美、山本和宏、加藤亮太、辰巳正春、鈴木義弥、楠大樹)

神戸芸術工科大学鈴木明ゼミナール(大澤睦、吉田庸佑、木村清夏)

東京大学太田浩史研究室(マリア・クラウジア、タライエ・ファラ)

ものつくり大学(宮本哲)

日本女子大学(青柳有依)

慶應義塾大学(円谷彩永子)

特別協力：

せんだいメディアテーク、畠山直哉、帰心の会(山本理顕、内藤廣、隈研吾、妹島和世、伊東豊雄)